

DO-IT Japan REPORT 2022



「コロナと合理的配慮が生む新しい障壁」

DO-ITの「I」は、「Internetworking」の略です。DO-IT Japanでは開始当初から、年間を通じたオンラインでの活動を行うことを基本としてきました。全国に散らばった障害のある子どもたち、若者たちをインターネットでつなぎ、大学等への進学を支えることは、国際的なDO-ITの活動の初期から基礎をなすものです。

世界的なコロナ・パンデミックの中でも、オンラインでのコミュニケーションは素晴らしい力を発揮しました。DO-ITは元々オンラインでの活動を基盤においていたので、私たちは歩みを止めることなく、新しい参加者との関わりをつなげることができました。それだけでなく、これまで「移動」という壁に阻まれて、DO-ITへの参加を躊躇していた人たちにも、サマースタディの学びの一端に、オンラインで触れる機会と応募への動機づけが生まれました。これは確かに、コロナがもたらした発展でした。

ただ、私たちが苦しんできたこともあります。それは、オンラインの環境では、「予期できない、思わぬ事態を体験として共有することができない」という限界です。オンラインでは、あらかじめ予定し、準備されたものしかプログラムとして提供できません。イレギュラーに起こった事態を共有することができません。イレギュラーが起ると、オンラインの接続は大抵、切れてしまうからです。

オンラインの体験を「うまくやろう」とすると、あらゆる面まで配慮の行き届いた、高度に計画されたプログラムにする必要があります。極論すれば、オンラインでは、プログラミングされ、用意されたものしか提供されません。しかし、私たちに「リアリティのある経験と学び」をもたらすのは、計画されていないことに出会い、困り、試行錯誤し、またそれを誰かと共にすることに他なりません。オンラインの学びは、確かに、過去にない可能性を広げています。しかし、それだけでは失われてしまう学びの機会が、確実に存在しています。

人は「うまくやろう」とすると、周囲に合わせたり、間違いの少ない道を選ぶうとしがちです。つまり、同調圧力を乗り越えることが難しく、自分自身の心では本当は感じていた、拒絶や主張をすることが難しくなりがちです。オンラインでは、この限界が、新たな社会参加の障壁として生じやすくなっています。場をコーディネートする誰かから、発言のステージが与えられないと、自分の意見が話せないことがままあります。発言はクリック一つでミュートされてしまうからです。

少し話題は変わりますが、コロナの3年間は、2016年に差別解消法が施行されてから半分弱の期間を占めています。差別解消法によって、不当な差別的取り扱いの禁止や、合理的配慮の提供は、地域間格差はあれど、着実に進んでいます。ただ、「合理的配慮の提供」は、単に「本人以外の周囲が、あまり負担にならないことだけ、かろうじて提供される」ようなものになると、その精神の本質を失ってしまいます。合理的配慮の本質は、本人にとって他の人と同様に学んだり働いたり、地域生活ができると感じられる選択肢を生み出せるかどうかにあります。また、そうでなければ、自ら希望を口に出して、より望ましい合理的配慮のあり方について話して良いのです。希望されたことがどこまで実現できるかは、また別の問題です。

もし、本人が「他の人と違う配慮を提供しているのに、まだ図々しく要望を出してくるのか？」と周囲に言われたとしたら？「ある程度の配慮がある状況」は、自分自身の希望や期待に目隠しをしてしまうような、新たな障壁になることがあります。ある程度用意された環境によって、緩やかに本人の独自の主張が「ミュートされている」のではないか。それは、合理的配慮が新しく始まった時代の、私たちが新たに越えるべき障壁です。

DO-ITの創設者であるSheryl Burgstahlerは、「Some kids with disabilities have expectations that are lower than they need to be. At DO-IT, we try to change that. (障害のある子どもたちの中には、必要以上に低い期待を抱いている子もいます。DO-ITでは、それを変えようとしているのです)」と言って、DO-ITを創設しました。配慮があることがかえって、「必要以上に低い期待」に繋がっていないか？用意された道筋だけを知らずに選ばれてしまっている状況(パターンリズム)に陥っていないか？ポストコロナの時代、コロナによって開かれた新しいアクセスは大切にしつつ、新たなパターンリズムを超えていく方法を考えねばなりません。

自分の希望を大切にできる視点と、それを育てる経験があれば、配慮があることは、用意されて行き着いた先ではなく、そこを出発点に、次の一步を踏み出す足場になります。大人たちが心配するまでもなく、障害のある子どもたち・若者たち自身は、軽やかにその限界を超える道を見つけ出ししていくのかもしれない。ただDO-ITでは、複数の選択肢を体験して比べられる可能性を大切にしたいと思います。そこから先に、目指すべき道を見つけ出し、新しい価値観を広げるのは、子どもたちや若者たち自身です。

DO-IT Japan ディレクター 近藤武夫



DO-IT Japan 2022 REPORT

Diversity, Opportunities, Internetworking and Technology

巻頭言「コロナと合理的配慮が生む新しい障壁」	02
DO-IT Japan とは	04
DO-IT Japan の3つのプログラム	05
1 スカラープログラム	06
1-1 夏季プログラム	08
夏季プログラムを終えた 2022スカラーの感想	16
1-2 特別聴講生プログラム	25
1-3 夏季プログラム後に行われるスカラープログラム	28
2 パルプログラム	30
3 DO-IT Japan の様々な活動	31
4 スカラーたちの活動 インタビュー	32
5 DO-IT Japan スカラーのデータ	37
6 共催・協力・後援	38

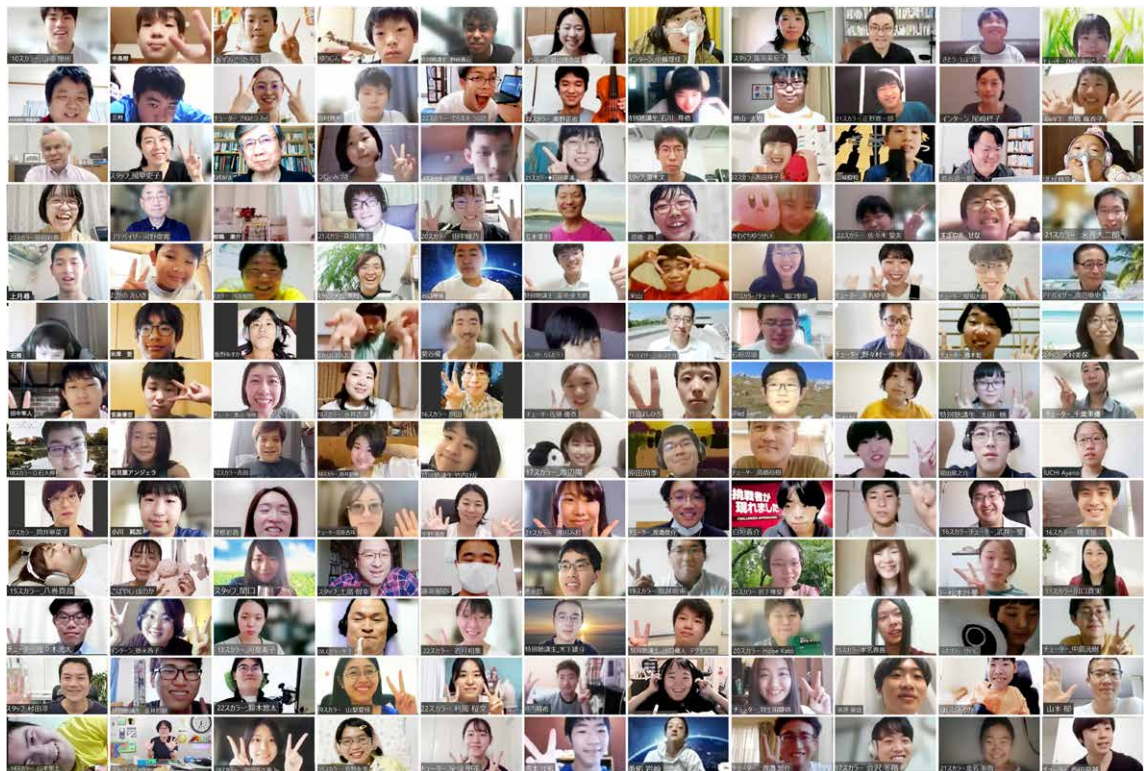
DO-IT Japanとは

DO-IT=Diversity, Opportunities, Internetworking, and Technology

DO-IT Japanは、障害や病気のある子どもたちや若者から、将来の社会的なリーダーを育て、共にインクルーシブな社会の実現を目指すプロジェクトです。東京大学先端科学技術研究センター、共催企業・協力企業との産学連携により、2007年から活動を続けています。

DO-IT Japanでは、テクノロジーを活用して自分の特性に最適化した学び方を体験すること、大学に進学した後のキャンパスライフと自立生活を体験すること、インターンシップや海外研修への参加、オンライン・オフライン両方で行われるDO-ITコミュニティへの継続的な参加など、多様な機会提供を行なっています。こうした機会を通じて、多様な価値観を持つ大人たち、同世代の仲間たちとの交流や情報交換が行われています。これらの経験から、障害や病気のある若者は、個別最適学び方・働き方・生活の仕方、障害の社会モデル、自立や自己決定、セルフアドボカシー（自己権利擁護）などの考え方を学ぶことに加えて、将来の夢の実現や、社会活躍とリーダーシップに関する学びの機会を得ることができます。

DO-IT Japanは、プログラムに参加した若者の中から、社会で活躍するリーダーが育つことを願い、活動を続けています。



DO-IT Japan2022 夏季プログラム参加者集合写真

DO-IT Japan の3つのプログラム

DO-IT Japanは、「1.スカラープログラム」、「2.パルプログラム」、「3.スクールプログラム」の3つのプログラムを行っています。障害や病気のある若者、その保護者、支援に携わる教員・学校など、幅広い層へ、インクルーシブな社会に向けた情報・機会の提供を行っています。

1. スカラープログラム メインプログラム

毎年春に
募集

障害や病気のある若者を対象とした参加型プログラムです。毎年春に参加者の募集が行われます。選抜者は「スカラー」と呼ばれます。スカラーは、年間を通じた様々なプログラムに、継続して参加することができます。

詳細は P6 より

2. パルプログラム 情報提供

ウェブサイト
にて登録可能

障害や病気のある本人(年齢は問わない)と、その保護者を対象とした登録型プログラムです。常時、ウェブサイトに参加登録することができます。登録者は、登録者向けのセミナーへの参加、メールマガジンを講読することができます。

詳細は P30

3. スクールプログラム 環境整備

障害や病気のある若者に関わる学校・教員を対象としたプログラムです。学校内にインクルーシブな学習環境を整備することを目的とし、共催・協力企業と共に、テクノロジーやサービス・支援に関するノウハウを提供しています。

※過去の活動報告は、ウェブサイトをご覧ください。



1

スカラープログラム

スカラープログラムは、障害のある若者を対象としたリーダー育成プログラムです。毎年春に、参加者の募集・選抜が行われます。2022年度は、以下の2つの枠組みで参加者の募集が行われ、プログラムが開催されました。

スカラープログラム 2022 (メインプログラム)

選抜された生徒・学生は「スカラー」と呼ばれます。スカラーは、その年度開催される夏季プログラムに参加し、その後開催される様々なプログラムに年間を通じて継続的に参加します。彼らは、多様な障害のある仲間やピア、障害支援の専門家など、多様な価値観をもつ人と出会い、意見交換する機会を得ます。

DO-IT Japanは、これらのプログラム参加や機会を通じ、彼らの中から社会で活躍する「リーダー」が育つことを期待しています。

求める参加者像

- スカラーとしてプログラムの参加を強く希望している
- テクノロジーを活用した多様な学習方法を知り、実践を希望している
- 進学/就労へ向けた意欲がある
- 自分の興味や関心のある物事について探求している
- DO-IT Japanが目指す、多様性理解を広げることに関心がある、またその活動に向けてリーダーシップを発揮できる

参加者

9名 (高校生7名、大学生2名)

参加期間

選抜された年度(2022年度)から、年間を通じて開催される様々なプログラムに継続的に参加します。

実施したプログラムの内容は P8 より掲載

特別聴講生プログラム 2022

スカラープログラムを、一部参加することができるサブ・プログラムです。選抜された児童・生徒は、以下のプログラムに参加します。

- 夏季プログラム：
 - ・ 事務局より案内された特別聴講生向けプログラム
 - A) テクノロジーコース、B) ダイバーシティコース
 - ・ 交流会
- DO-IT 事務局への質問・個別相談

- 特別聴講生としてプログラムの参加を強く希望している
- テクノロジーを活用した多様な学習方法を知り、実践を希望している



A) テクノロジーコース (小学生) 11名
 テクノロジーコース (中高生) 29名
 B) ダイバーシティコース 11名

2022年度中 (2023年3月31日まで)

実施したプログラムの内容は P25 より掲載

共催・協力・後援

共催企業

ソフトバンク株式会社、日本マイクロソフト株式会社、P&G ジャパン

協力企業

株式会社 atacLab、株式会社カプセルアシスト、株式会社リコー、トヨタモビリティサービス株式会社、フォナック補聴器

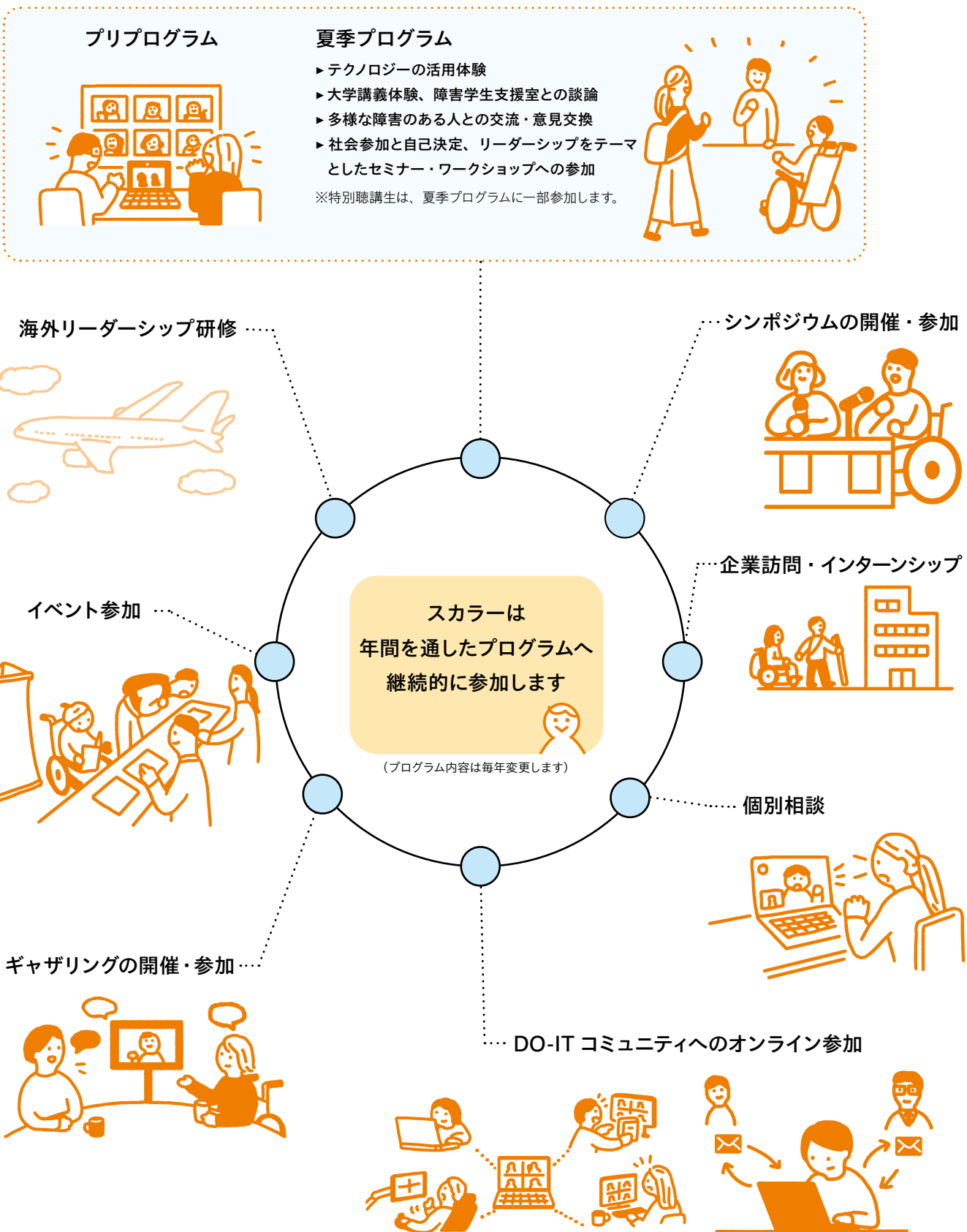
後援

厚生労働省、文部科学省

詳細は P38-39

スカラープログラム：年間スケジュールの例

スカラープログラムで、全国から選抜された障害や病気のある若者「スカラー」は、多様な価値観をもち、社会で活躍する様々な人たちと出会います。スカラーが彼らと出会い、意見交換する機会は、スカラーが将来のロールモデルを得たり、多様な価値観を知り、将来の社会的包摂を導くリーダーシップを高め合う学びの機会となっています。



1-1 夏季プログラム

夏季プログラムは、その年度に選抜されたスカラーが初めて参加するプログラムです。「テクノロジーの活用」「自分自身や障害についての理解」「セルフアドボカシー」「自立と自己決定」をテーマとしたプログラムを開催しました。

0 プリプログラム

夏季プログラム (2022年8月7日~10日 @オンライン開催)

1 日目

『視野を広げる』

- レセプション・プログラムガイダンス
- トークセッション1「自立と依存を考える」
- トークセッション2「皆の大学生活」
- ウェルカムパーティー!

2 日目

『大学の「学び」にふれる』

- 大学を知る1「大学講義体験」
- 大学を知る2「東京大学のバリアフリー支援」
- テクノロジーセッション「学びの本質に迫ること」
- ラップアップ

3 日目

『テクノロジーの可能性を知る/学ぶ権利を保障する』

- マイクロソフト・スペシャルセッション
- セルフアドボカシー『「合理的配慮」を求めよう』
- ラップアップ

4 日目

『多様な価値観にふれる / 自分の意見を発信する』

- コンカレントセミナー
- 夏季プログラム修了式
- 交流会2022!

プリプログラム

2022スカラーは、7月の毎週金曜日・土曜日に、オンラインで開催されたプリプログラムに参加しました。各日に設定されたテーマに基づいて、講義を受けたり、意見交換や課題を実施することで、夏季プログラム参加に必要な準備を進めました。

プリプログラムテーマ

1週目 7/8,9	【オリエンテーション】ガイダンス、テクノロジーを活用すること 【講義】障害の「社会モデル」を知る
2週目 7/15,16	【講義】高等教育における障害のある学生に対する合理的配慮を知る 【ワークショップ】自分の生活を整理する
3週目 7/22,23	【ワークショップ】どのような配慮を求めたいと考えているか?相手に伝えよう(1) (2)
4週目 7/29,30	【発表】セルフアドボカシー:合理的配慮を求める(実践日)(改善日)
最終日 8/5	【まとめ】夏のチャレンジを語る

[2022スカラーの紹介と夏季プログラムの目標]

自分の思うように言葉を並べることが苦手ですが、話しかけたり質問して、意見や考えを知って、自分の視野を広げたいと思っています。

利國 桜文
Toshikuni Saya



1日地元でホテルをとって介助者と参加します。プログラムを通じて多くの人たちと繋がっていかれたらと思うので、私からもどんどん話しかけます。

佐々木 愛美
Sasaki Ami



1日自宅から離れて参加します。緊張するとともにワクワクしています。色々な人や先輩からたくさん話が聞けたら嬉しいなと思っています。

佐野 夢果
Sano Yumeka



困難を多く抱えている人の考えを聞きながら、自分でもしっかりと話をしていけるようにしていきたいです。

堀田 龍之介
Hotta Ryunosuke



色々考えてホテルから参加することにしました。1人で生活することもチャレンジします。

高野 正志
Takano Tadashi



2022スカラーの皆の行動を見て、自分も少しずつ動いたり考えたいと感じました。生活やヘルパーさんのことを特に話したいと思っています。

鈴木 悠太
Suzuki Yuta



参加者のプロフィールを見て、すごく色々な人たちが集まっているんだと思ってとても楽しみです。

黒田 祥子
Kuroda Shoko



私は、見た目からは障害者というのがわかり辛く、人に支援を依頼することに自分ではすごく困難を感じています。皆さんに意見を聞きに行きたいと思っています。

岩月 和奏
Iwatsuki Wakana



プリプログラムでテクノロジーフィッシングをスタッフとしましたが、もっと機器を知りたいです。たくさんの人と話したいです。

寺前 翼
Teramae Tsubasa



視野を広げる

夏季プログラムは、プリプログラムで出会ったメンバーに加え、DO-ITアドバイザー、DO-ITスタッフ（DO-ITをサポートしてくれる大学・団体教職員）、大学生チューター（先輩としてプログラムに参加する大学生）が大集合！参加者全員がオンライン会場に集まり、夏季プログラムがスタートしました。

レセプション・プログラムガイダンス

10:00

トークセッション1「自立と依存を考える」



熊谷晋一郎
DO-ITスタッフ

ご自身も障害があり、医師/大学教員として活躍するスタッフから、自身の自立生活の確立の経験談も交えながら「自立と依存」についてお話いただきました。2022スカラーは、自分の頭の中にある様々な思いや考えを解きほぐす時間を過ごしました。



トークセッション2「皆の大学生生活」

14:00



立石大伸
2018スカラー

実際、障害のある学生はどんな大学生生活を送っているの？先輩スカラーたちが、大学での学びや学外の活動など、リアルな話を共有してくれました。大学生チューターからの余話も尽きない時間となりました。



清田みお
2021スカラー

また、移動方法を複数知り、選択できることは、生活を楽にするスキルとなります。福祉車両の紹介、利用者の体験談も話されました。



【セッションで出たコメント】

皆と同じで、私も疲れやすいタイプですが、自覚が難しいです。自分に必要な配慮を大学に説明して相談できるようになりたいと思いました。

岩月和奏
2022スカラー



自分で決める機会が少ないと、何でもまず苦手意識を持ちがちになります。ちょっとずつでも自分で決める範囲を広げていけるといいと思っています。

立石大伸
2018スカラー



大学の授業の良い所は、自分でスケジュールが組める自由度が高い所だと思っています。私は自分の体力に合わせて調節して楽しく生活することができています。

清田みお
2021スカラー



ウェルカムパーティ！

16:30

新たに仲間となった2022スカラーを迎え、夏季プログラム参加者が集まり歓談しました。話してみると意外な共通点がたくさん！お互いをよく知るきっかけとなりました。



大学の「学び」にふれる

午前は、大学講義体験とバリアフリー支援室のスタッフと意見交換の時間を過ごしました。午後は、大学教員でもあるDO-ITスタッフより、学習に役立つ様々なスキルやテクノロジーの紹介を受けながら、「学びの本質とはなにか」を考える時間を過ごしました。

1 大学を知る1「大学講義体験」

9:30



太田 禎生
東大先端研
准教授

研究室紹介

ロボティック生命光学分野。バイオテクノロジーの技術を開発し、細胞や生命の計測から得られたデータから、生命科学や医学に役立つような知見の発見に取り組む研究室。



研究室
ウェブサイト



「ネットワーク化する計測マシンによる細胞解析」と題し、研究室の最先端の研究を受講、その後、意見交換を行いました。講師より、ご自身のユニークなキャリアパスの経験談も、お話をいただきました。

2022スカラーは、自分たちの進路をどう選ぶかについて、考えを広げる視点を得る時間となりました。



2 大学を知る2「東京大学のバリアフリー支援」

11:30



中津 真美
東京大学
バリアフリー
支援室



支援室
ウェブサイト

東京大学の支援室で働く職員の皆さんより、東京大学が行っている障害学生への支援の例や支援室の業務内容を話題提供いただきました。

支援室の概要や活動内容、障害学生が支援を受けるまでの流れや支援体制の具体的な取り組みとその思いを聞き、数多くの障害学生が大学で配慮を受けて学んでいることを知る時間となりました。



山本 篤
東京大学
バリアフリー
支援室



[セッションで出たコメント]

大学で配慮を求めたいと思っています。障害のある学生が、大学入学前に身につけておいた方がいいスキルはありますか？

佐野 夢果
2022スカラー



学生からこう伝えられると相談業務が行いやすいなどのポイントや、相談する側が心がけておくこと、用意しておくものはありますか？

高野 正志
2022スカラー



「自分トリセツ」を作るなど、障害のことを知らない人にわかってもらう方法を考えるのがポイントかなと思います。

山本 篤
東京大学
バリアフリー支援室



テクノロジーセッション「学びの本質に迫ること」

13:30



近藤武夫
DO-IT
ディレクター



巖淵守
DO-IT
アドバイザー



渡辺崇史
DO-IT
アドバイザー



山口俊光
DO-IT
スタッフ



高橋麻衣子
DO-IT
スタッフ

「学ぶ」こととは、何をどのようにすることを期待されているのでしょうか。また、普段行っている行動も、その意味や理由を聞かれると、なかなか答えられないことがあるのではないのでしょうか。「ノートをとる意味はなに?」「テストは何を見る(評価する)ために実施されているの?」

今回「学びの本質に迫る」をメインテーマとして、様々な視点から参加者とディスカッションしました。自分が持つ力を十分に発揮するための工夫の仕方についても、話が膨らみました。

【テーマトピック】

■ 大学での「学び」とは
現役大学教員の考える「大学での学び」

■ 大学での「学び」を達成するために
どう計画をたてる? どう処理をする?

■ 「学び」をどのように推進するか
学びの「本質」はどこにあるか?
自分に便利で必要な代替手段・ICT
を活用する



16:00

ラップアップ (18時半よりプログラム「アイスブレイクナイト」実施)

共催
プログラム

ソフトバンク・スペシャルセッション

2022年8月8日(月) 10時~11時半
オンライン開催

【スケジュール】

- オープニング
- 話題提供:「障がい」と「働く」
- トークセッション:
「皆が思う働き方・未来の働き方」
- クロージング



横溝 知美
ソフトバンク株式会社
CSR本部 多様性推進課

「皆が思う働き方・未来の働き方」

大学生・大学院生スカラーを対象に、「皆が思う働き方・未来の働き方」をテーマとした意見交換プログラムを開催しました。

今回、ソフトバンク株式会社CSRで働く横溝さんより、ソフトバンクの社会課題解決に向けた取り組み、社内でも推進している「新しい働き方」について話題提供いただきました。また、障害のある先輩として、横溝さんご自身の経験談の共有や応援のメッセージをいただきました。働くことのあり方・付き合い方に対し、スカラーから多くの意見が飛び交う時間となりました。



【参加者の感想(一部抜粋)】

自分自身も見えない障害を持っているので、働くことを考える上でどんなスタンスでいるべきか、どんな会社を選ぶべきかなどの悩みがあります。具体的な体験談を伺うことができ、大切な時間を過ごせたと感じています。

これまで自分にあった学習・生活方法を見つけ出して大学進学してきたように、これからの就活や就労も、自主的にアクションを起こし続けたいと改めて思いました。

社会課題を解決する仕事に就きたいと思いつつも、どのような着眼点を持って応募先を絞っていけばよいか分かりませんでした。しかし、お話が伺えて、目指す就活のイメージをより鮮明にすることができました。

テクノロジーの可能性を知る / 学ぶ権利を保障する

午前は、日本マイクロソフト株式会社の社員さんより、最新のテクノロジーと、多様な雇用の様子についてご紹介いただく特別セッションが行われました。午後は、2022スカラーが、自作したプレゼン資料を使い、参加者に向けて自身の合理的配慮を説明し、求める体験をしました。

9:30

共催
プログラム

マイクロソフト・スペシャルセッション



島田 悠司
日本マイクロソフト株式会社
文芸営業統括本部
インダストリーエグゼクティブ



小野 育美
日本マイクロソフト株式会社
ヘルスケア統括本部
アクセシビリティ担当



西脇 資哲
日本マイクロソフト株式会社
コーポレート戦略統括本部
業務執行役員
エバンジェリスト



坂巻 玲
日本マイクロソフト株式会社
モダンワークビジネス本部
文教推進チーム プロダクト
マーケティングマネージャー



春日井 良隆
日本マイクロソフト株式会社
モダンワークビジネス本部
プロダクト マーケティング
マネージャー 兼 ワークス
タイル変革推進担当

「テクノロジーは自分の可能性を広げる魔法の道具」を合言葉に、日本マイクロソフト社の多種多様な場面で働く社員の皆さんより、各テーマに基づいた多くの話題提供をいただきました。機器を使いやすくするアクセシビリティ機能、最新のVRや仮想現実、人工知能の活用例、また、社内の多様な就労環境をご紹介いただきました。2022スカラーは、テクノロジーの可能性や働くことのやりがいなど、考えを膨らませる時間になりました。

[テーマ]

- Microsoftの教育事業の取り組み
- Microsoftのアクセシビリティの取り組み
- Microsoftのテクノロジー紹介
- Microsoftの働き方紹介
- Microsoftの働き方・オフィス紹介



[セッションで出たコメント]

ゲームのアクセシビリティに対する考えや情報を教えてくれた。自分も利用するだけじゃなくて作れるようになりたいと思った。



寺前 翼
2022スカラー

PowerPointは使っていましたが、字幕機能が標準搭載されていることに気づいていませんでした。驚きました。



◀ PowerPointでのリアルタイムの自動キャプションまたは字幕の表示

堀田龍之介
2022スカラー

学校もその教室という場所で、皆がまとまって授業を受けるということは、もしかしてこれから変わっていくのかもしれない。既に変わっている学校もいくつか出てきています。



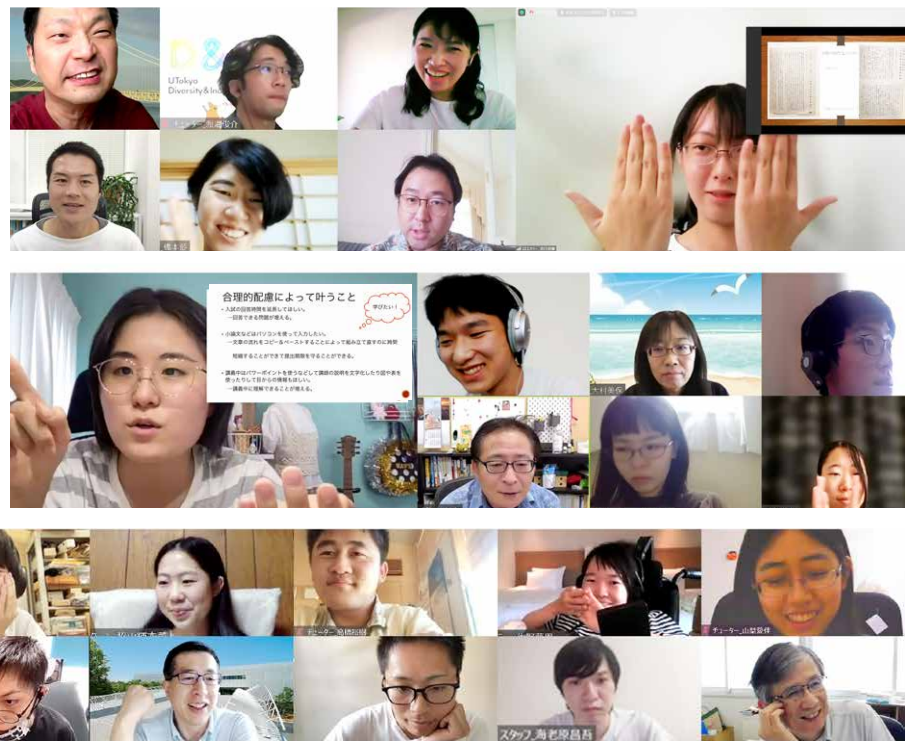
春日井良隆
日本マイクロソフト株式会社



13:30

セルフアドボカシー『合理的配慮』を求める ※3つのグループに分かれました。

合理的配慮を求めるプレゼンを行う時間。2022スカラーは個別の場面を想定して、スライドを作成。そのスライドを用いて学校に合理的配慮を求めることを想定したプレゼンを行い、様々な立場の人からの意見を受けます。ディスカッションを通して、求める合理的配慮の必要性を説明する方法や建設的対話の持ち方などを模索し、緊張しながらも充実した時間となりました。



[セッションで出たコメント]

私は、UDトークを講義において情報保障手段の一つとして用いることを配慮として求めたいです。また、修正者として学生サポーターさんを2人つけてほしいことも求めたいです。

佐々木愛美
2022スカラー

机や機器の配置や設定など、細かい指定が必要なものこそ、細かく自分の希望の姿や形を明らかにして、初めて配慮の内容を聞く人にも分かるような形に表しておくことが大事だと思います。

山梨愛佳
大学生チューター

プレゼンを作成したり、スタッフやスカラーたちと会話をしていく中で、親以外の他者からの介助の必要性を感じるようになりました。頭の中だけで想像していても、自分に合った配慮を求めることはできないので、経験を積んでいって自分の求めたい配慮内容をクリアしていきたいと思います。

鈴木悠太
2022スカラー



16:30

ラップアップ

2022スカラーは、心に残ったセッションや夏季プログラムを通して得た新たな気づきなどを、参加者と共に、ゆっくりと振り返る時間を過ごしました。



[セッションで出たコメント]

私は、自分の思いをその場で瞬間的に言葉を並べて伝えるのが苦手。でも、つまりながらも自分の思いを伝えることで、周りの方から新しい考え方とかアイデアをもらえました。自分の思いを伝えることが本当に大切なんだなって思いました。

利國桜文
2022スカラー

これまでずっと障害や自分の困難を隠してきました。DO-ITに参加して、こんなに周りに温かい人たちがいるんだって知って嬉しくなりました。皆それぞれ抱えている不安とか本音も共有できて、この夏季プログラムが終わった後も、DO-ITに参加したことを思い出して頑張ろうと思いました。

黒田祥子
2022スカラー

多様な価値観にふれる / 自分の意見を発信する

大学で、多くの授業から自ら学びたい授業を自分で選択する体験として、4日目は「コンカレントセミナー」と称し、関心のあるセミナーを自ら選び参加する機会を設けています。今年は11コマの多彩なセミナーが行われました。 ※全スカラー、及び、特別聴講生2022(ダイバーシティコース)が参加しました。

10:00

コンカレントセミナーA

〈1〉自由と安全配慮の狭間で



土島智幸
稲生会

呼吸器などの医療介助を受ける人の中には、「何かあったらいけないから」と周囲の人に活動を制される経験をした人もいます。この経験は医療現場だけでなく、学校など日常生活でも発生します。自身の自由と安全、その現実と理想について参加者同士で話し合いました。



奥山俊博
東大先端研



大村美保
筑波大学



〈2〉なぜ大学との「対話」が求められるのか：障害学生支援・基礎編



星加良司
東京大学

大学と障害のある学生が支援について話し合う時、両者の間には「対話」が必要と言われますが、そもそも「対話」とは一体何なのでしょう。この問いを出発点に、大学における障害のある学生への支援とそこで生じる「対話」のあり方について話し合いました。



村田淳
京都大学



コンカレントセミナータイムスケジュール

A 10:00-11:30	〈1〉自由と安全配慮の狭間で
	〈2〉なぜ大学との「対話」が求められるのか：障害学生支援・基礎編
	〈3〉見えない障害とカミングアウト
B 13:00-14:30	〈4〉医療・医師との付き合い方を考える
	〈5〉障害学生支援室との付き合い方～学生視点で大学ごとの支援の仕組み、シェアしてみない?～
	〈6〉社会的企業をつくる・広げる
	〈7〉だれもが楽しめるミュージアムをつくる
C 15:00-16:30	〈8〉支援者とアドボケイト(権利譲渡をする人)の違い
	〈9〉あなたが世界を変えるには：ものづくりと障害で変える社会課題
	〈10〉自分の体の声を聞く
	〈11〉障害や疾患とともに「働く」ことのリアリティ

〈3〉見えない障害とカミングアウト



飯野由里子
東京大学

外見からは「見えない障害」が目立たない状況ですが、外見だけではわからない状況について誤解を受けたり、相手に伝えたくないことがあるはずです。障害をカミングアウトする時の困りごとやためらいを持ち寄り、共通点や違いについて理解を深めました。



脇山輝衣菜
2017 スカラー



13:00

コンカレントセミナーB

〈4〉医療・医師との付き合い方を考える



茅田羅勝義
徳島文理大学

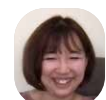
障害のある若者から、身体に不調をきたした時、自分の考えを医師に伝えるのが難しいという声を耳にします。他にも、医師に日々の状況をどの程度相談して良いかと悩む声も聞きます。医師との関係や付き合い方について、一緒に考えを出し、話し合いました。



大村美保
筑波大学



〈5〉障害学生支援室との付き合い方～学生視点で大学ごとの支援の仕組み、シェアしてみない?～

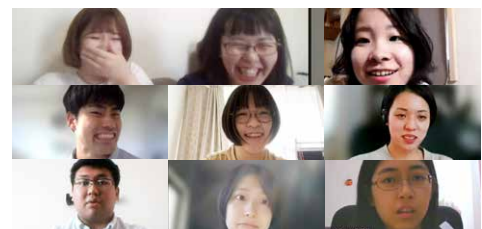


渡辺陽
2017 スカラー

大学生スカラーが集まり、所属大学で行われている障害学生支援の取り組みをシェアし、意見交換をしました。学生が肩の力を抜いて合理的配慮を求めるためには何が必要かなど、障害のある学生の視点から見た、障害学生支援に期待することが話されました。



堀口里奈
2017 スカラー



〈6〉社会的企業をつくる・広げる



高橋亮彦
ボーダーレス・ジャパン

「社会課題を解決する」ことに、あなた自身もプレーヤーとして飛び込むなら、どのような参加ができるでしょうか。社会的企業家を育て、全国に広がる活動を行ってられる企業の方をゲストに招き、このテーマについて参加者全員で議論しました。



山内泰
東大先端研



〈7〉だれもが楽しめるミュージアムをつくる



田中沙紀子
日本科学未来館

誰もが参加でき、楽しむことができるアクセシブルミュージアムを実現するためには、どのようなことが必要か。ゲストからの話題提供をもとに、様々な立場やニーズをもつ参加者の経験を共有しながらディスカッションしました。



15:00

コンカレントセミナーC

〈8〉支援者とアドボケイト（権利譲渡をする人）の違い



玉木幸則
社会福祉法人
西宮市社会福祉協議会

あなたが受けてきた支援と、他の人が受けてきた支援は、同じ「支援」という言葉であっても違うものかもしれません。本人すら意識していないかもしれない本当の想いを、どう相手から引き出し、応援していけば良いのか。ソーシャルワーカーという役割を題材に、熟考を重ねました。



奥山俊博
東大先端研



大村美保
筑波大学



〈10〉自分の体の声を聞く



熊谷晋一郎
東大先端研

自分の体は、いつも正直に今の心身状態を雄弁に語ってくれるわけではありません。突然思いもしない状況を経験した人も少なくないのでは？ 身体の声に耳を澄ませて体の声を聞いてみることで、自分の身体と打ち解けていくことをテーマに、考えを深める時間を過ごしました。



松清あゆみ
東大先端研



〈9〉あなたが世界を変えるには：ものづくりと障害で変える社会課題



渡辺崇史
日本福祉大学

障害や貧困などの大きな社会課題は、巨大な組織や国家にしか解決できない問題なのでしょうか。テクノロジーを活用すれば、私たち自身が世界を変えることができるかもしれません。大学での取り組み事例を基に、私たちは何ができるかを議論しました。



山口俊光
新潟大学



〈11〉障害や疾患とともに「働く」ことのリアリティ



近藤武夫
東大先端研

働くことに関する社会課題への取り組み事例や、既に働いているスカラーたちの経験を聞き、これから就労と社会活躍を目指すスカラーと議論しました。就職枠の違いや働く時の介助者との付き合い方、メンタルケアや自己実現のあり方など「リアル」な話を交わしました。



17:00

夏季プログラム修了式

17:30

交流会 2022!

夏季プログラム全参加者が大集合! サイコロアプリを使い、出た目のテーマに関して話し合いました。話し足りないくらい大いに盛り上がる時間となりました。



黒田 祥子
Kuroda Shoko
愛知県/大学生



人やものを頼れることも自分の力

私は複数の精神障害を抱えており、大学の授業に参加することや友達と遊ぶことを諦めてきた過去があります。目に見えない障害のため、他者に自分の困難さを理解してもらうのは容易ではありません。DO-ITでスカラーとしての活動を始めるまでは、精神障害によって生まれる特性とマジョリティの中心で作られた社会との間にそびえ立つ壁を乗り越える方法があるなど想像もしていませんでした。テクノロジーを活用する等の工夫を行うことや自ら声をあげて他者に伝えようとするこの大切さをDO-ITで学び、私は自分の見る世界が大きく広がったと感じています。

プリプログラムでは合理的配慮の求め方や障害の社会モデルとは何か、なぜ「社会」を間に入れて考えなければならないのかについて学びました。スタッフさんからは紙やペンを使わない記録方法として、OneNote等のデジタルツールを教えてもらい、今では毎日のように大学の勉強等で使用しています。

夏季プログラム1日目には、依存先の分散についてのお話を聴き、仲間と意見交換を行いました。以前から感じていた依存先を分散させることに対する不安が少し和らいだ気がしています。

3日目には初めて訪れた大学の研究室から合理的配慮を求めるプレゼン発表を行いました。プレゼンを通して幼少の頃の自分の代弁者となることができたような実感もあり、達成感を得ることができました。

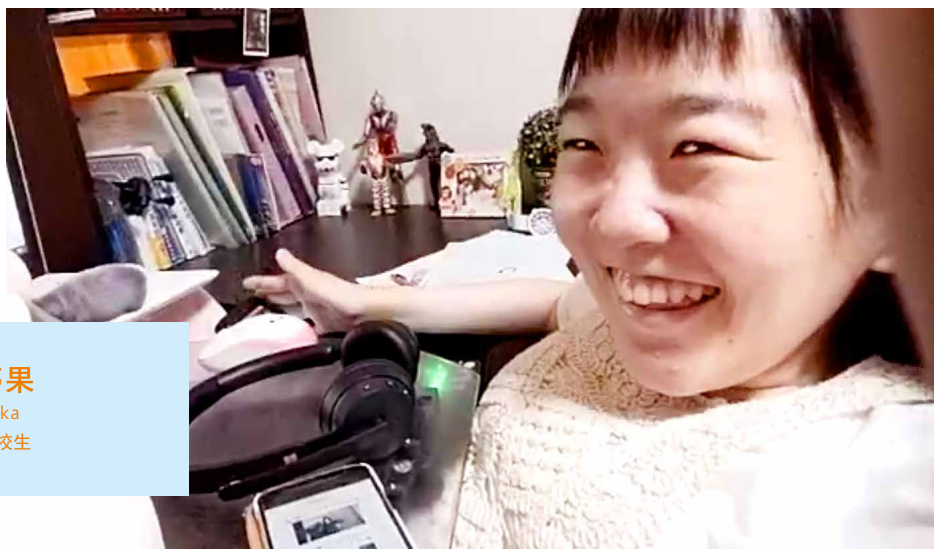
最終日にはたくさんの過去スカラー生や聴講生の方と交流し、さまざまな特性を持つ仲間のあたたかさに

触れました。

また、プログラムの期間中は事務局から外の雑音を抑えてくれるノイズキャンセリングヘッドホンをいくつかお借りしました。プレゼン発表を行うために訪問した大学への長い道のりもこのノイキャンを使って自分の世界に入り、人混みの中でも耐えることができたと思っています。

夏季プロを終えた後、私はひとつのことに気がつきました。それは自分自身が生んだ不安自体が、自分と社会とを分断する壁となっていたということです。他者からは全く見えない障害を抱え、“障害”や“健常”のどちらの仲間にも入れないような孤独感を抱えていましたが、それは過去を振り返ると、皆に嫌われたくないという気持ちから心のうちを明かさないように生きてきた自分が作り出した壁だったのかもしれませんが。私はDO-ITでの活動を通し、自分の苦手なことや周りに求めたいことを積極的に伝えることで安心して過ごせる環境や仲間を自分の力で作っていくことができると実感しました。人やものを頼れることも自分の力です。これから私は『自分ひとりで頑張る』にサヨナラをしようと思っています。DO-ITを通して見えた優しい世界と22スカラーのみんなの存在は、これから茨の道を歩んでいく私の勇気であり、希望です。





佐野 夢果

Sano Yumeka
静岡県／高校生

今の私なら、きっと

私は今わくわくしている。この先の出会いに、経験に、未来に。思わず飛び出してしまうような、そんな気持ちなのだ。今の私を見たら、前の自分はびっくりすると思う。それ程に、私はDO-ITでの時間を通して自分の成長を実感している。

最初は本当に緊張したし、どこまで話していいのかわからず、助けを求めているのか、変わるためにスカラーになったはずなのに、周りに線を引いてしまう自分がいた。しかし自分の思いを受けとめてくれる22スカラーのみんなやDO-ITのスタッフさんなどたくさんの方々との関わり対話の中で、自分の気持ちを伝えていいんだ、助けを求めているんだ、と自分の中の気持ちに変化がうまれた。そして今まで伝えても、理解してもらえないと最初から伝えることを諦めてしまっていた合理的配慮。今までも伝えようとしても、うまく伝わらない経験から私には伝えられない、伝わらないという諦めの気持ちが大きくなっていったのだと思う。しかしDO-ITでのたくさんの講義や対話を通して、自分に必要な配慮を本当の意味で伝えられるのは自分だし、自分の口で周りに伝えていこうと思えた。特に合理的配慮を求めるスライド発表は、自分の弱さと向き合いスライドをつくる中で、今まで見えてこなかった、改善点が見えてきた。そして、発表本番でもたくさんアドバイスをもらえたり、ここいいね!とほめてもらえたりしたことで、たくさんの気づきがうまれたし、自信になった。伝えるということの本当の意味が、講義やスライド発表を通してよく見えてきた。また合理的配慮について知識を深められたこともとても大きかった。

合理的配慮を伝えようと一緒に頑張った仲間や、本気で思いを受け取め一緒に考えてくれる人達に出会い、私はたくさんの勇気をもらった。上手く伝えられないことも多いかもしれない。しかし今の私なら、きっと諦めずに合理的配慮を求めていけるという勇気や自信をもてた。

私は今、たくさんの講義や対話、時間を通してたくさん考え悩み、時に周りに助けを求めながら、自身が大きく成長できたことを実感している。その中でも私がたくさん学び気づき、成長できた事がある。それはホテルに実際に泊まって行った介助体験だ。

介助体験をして私が1番感じたこと。それは、「楽しい!」ということだ。確かに失敗の連続だったし、上手くいかないことも多かった。しかし今回の介助体験を通して未来に希望が持てたし、自立したいという気持ちが強くなった。自立するためにも、「依存先」を自分の手でたくさん見つけて、増やしていきたい。そして自分の本当にやりたいことも、DO-ITでの時間を通してたくさん見つけることが出来た。私は将来、障害当事者として自分の視点や経験を、社会に伝えていきたい。少しでもみんなが生きやすい社会にするために、障害当事者として私には何が出来るのか。模索し続けたい。





利國 桜文

Toshikuni Saya

香川県／高校生

伝えないと何も変わらないから伝える

私は高2の時に登校中に交通事故に遭って、治療とリハビリのため約半年間高校を休み、気がいたら事故前までの生活とは大きく変わっていて、浦島太郎状態でした。なかなか自分の状態を理解できない中で高校生活に戻ると、勉強など1人では解決できないことに遭遇し、しっかりと今の自分と向き合う必要があると思いました。

プログラムに参加したものの、課題と学校の宿題を両立するのが大変でした。しかし、提出日までにできなかったことをスタッフに伝えると、改善点や選択肢も教えてくれて、自分の状況を伝えることが本当に大切で、伝えないと何も変わらないから伝えることを心がけました。

プログラムの始めのうちは、大勢の人がいる中で瞬間的に思いを言葉にすることが難しく、「うまく話せんし嫌や!」とむしゃくしゃしていました。話した後に「こんな思いもあったのに」と後悔ばかりしていました。しかし、話す回数を重ねる中で、皆が話をよく聞いてくれたり、私の気持ちを読み取ってくれたりして「あなたの気持ちがよく分かるよ」や「さやさんが言ったように…」など私の言葉を受け入れてくれる言葉があって、気持ちが楽になり、考えや思いを話す抵抗感が少なくなっていました。次第に伝わっていることの嬉しさや安心感みたいなものを感じ、事故後、思うように話せなくなった今の自分を否定せず、受け入れることができるようになりました。発表など改まって話す時には、事前に話したいことを書いて原稿を読みながら発言したり、プレゼンなどの時には漢字に送り仮名をつけたり、スペースを入れて言葉の間を分かりやすくするなどの工夫をしています。

教授と過年度スカラーから教わったノートテイカーの利用やNotabilityやMicrosoft OneNoteなどのアプリを一つ一つ試してみました。話を聞きながらノートを取ることが難しい時は、アプリを使用すると漢字の変換がスムーズになったり、後で整えることが楽になりました。書き写したり要約して記録することが大変な時は、録音する機能を活用しました。まだどれが自分に合うのかわからないので、これから大学に進むまでにどれが自分に合うのか見つけていきたいです。

私はこれから、英語は勿論その他の言語や手話も習得したいです。世界の情勢や福祉、教育環境についても学びたいと思っています。色々な障害あるなしに関わらず色々な人と話すことで、様々な視点を知りたい、自分の障害や個性をどのように受け止めているのかを知って視野を広げたいです。私はDO-ITの後、多種多様なバックグラウンドをもつ人が集まるカナダへ短期留学しました。そこは公共交通機関や施設のバリアフリー化が進み、車椅子の人も赤ちゃんを乗せたベビーカーを押す人もカートを押す高齢者もどこでも安全に移動していました。一人一人が違って当たり前前の環境を肌で感じることもできました。日本にはない海外の良い所を知って、日本にも広めていく活動もしたいです。過年度スカラーの中にも留学した人がいることを知り、DO-ITを通して繋がりを広げられる予感がしています。

DO-ITの参加を通して繋がりを得たり、色々な選択肢があることを知ったりしたことによって、1年前の私より心が明るく軽やかになっています。



鈴木 悠太
Suzuki Yuta
静岡県 / 高校生

気持ちに変化を生み出すきっかけ

DO-ITに参加する前の私は、親から言われたこと、人から聞いたことをこなす受け身の状態だった。なぜなら環境の変化を恐れていたからだ。肢体不自由の障害を負った経験から全ての行動が怖いと感じ、新しく挑戦することに否定的になっていた。私はそんな自分を変えたい、と思いDO-ITに参加した結果、自分の気持ちに大きな変化を起こせた。

まず、私が驚いたのは先輩スカラーの姿だ。スカラー同士意見を交わす中で、先輩スカラーにはたくさん挑戦した経験の中でたくさん失敗し、その分だけたくさん乗り越えてきた力があると気づいた。その姿に憧れを抱いたと同時に、自分の中で挑戦の必要性が本当に理解できた出来事であった。自分も失敗を恐れず、行動を起こしていきたいと思えた。

また、夏季プログラムの講義の中で印象に残っている考え方がある。熊谷先生の「自立と依存」について考える講義の中で、「1つに頼らず、支え（依存先）を増やしていくことが自立に繋がる」という考えだ。この考えで自分の固定観念が大きく変わった。私は肢体に不自由があるため、生活するには誰かの手助けが必要になる。そのことから「親の手助けから離れなければいけない」という使命感に囚われていた。しかし、講義を通して「自分の暮らしやすい環境にするために支えを増やしていきたい」という前向きな考えに変わることができた。私はより良い生活スタイルを確立していくために、他人による介助に挑戦していきたいと思う。

私は夏季プログラム中やその後に挑戦したことがあ

る。夏季プログラム中には新しい情報機器の操作方法を探すため、DO-IT事務局と一緒に試したり、自宅にある機器の見直しをしたりした。その結果、今まで実用的ではないと思い込んでいた機器も組み合わせることで使いやすさがUPした。新しくできることが増えたことに嬉しく感じた。これからも自分に合った使い方を探るために自ら積極的に情報を集め、試していこうと思っている。さらに、夏季プログラム後も共通テストに向け、配慮申請にも挑戦した。自分の状態を知らない人にも自分の状況、求める配慮を伝えるために、自分の状態や困難なことを見直すことから始めた。これは夏季プログラム中に行われた「大学への配慮申請」の練習が起きたと思う。

DO-ITは、自分の気持ちに変化を生み出すきっかけになった。それは夏季プログラムでの講義やスカラーとの話し合い、相談や解決策を共に考えてくれたスタッフの伴走があったからだと思う。これからは「挑戦」の始まりだ。挑戦には失敗や苦難が付き物だが、それを乗り越えることで人生を豊かにしていけると思う。これからも、自分らしく挑戦していきたい。



A close-up portrait of Teramae Tsubasa, a young man with short dark hair and glasses, smiling broadly. He is wearing a white shirt and a black necktie. The background is slightly blurred, showing what appears to be a desk or table with some items on it.

寺前 翼

Teramae Tsubasa
大阪府／高校生

他人の考えは参考になる

僕がDO-IT Japanに入りたいと思ったきっかけは、母がスカラーのネットニュースを見て、僕も障害者の人たちと、おしゃべりができて、面白そうと思ったからです。

DO-IT Japanの夏季プログラムでは、大学生活を知れたり、多様な障害を持った人たちと意見交流ができた、最先端の技術を学べたりすることです。

僕は、この夏季プログラムで印象に残っている点が六個あります。

一つ目は、一日目の「トークセッション1自立と依存を考える」の時間で、自立とは友達やヘルパーさんの助けを借りて、生活していくことなんだなあと思った点です。なぜなら、僕は親元を離れて、十八歳になったら自立してみようと思ったからです。

二つ目は、一日目の「トークセッション2皆の大学生活」の時間で、大学の生活はレポートとか大学の課題で忙しくなると思った点です。なぜなら、僕は将来大学にいきたいと思っているからです。

三つ目は、二日目の「大学を知る2大学での支援」の時間で、やっぱり東大は設備が素晴らしいので、行きたいと思った点です。なぜなら、車椅子での移動がしやすく、障害者への配慮もしっかりしているとわかったからです。

四つ目は三日目の「マイクロソフト株式会社SPセッション」の話題提供を受け、ぜひ入社してみたいと思った点です。なぜならMicrosoftがAIを航空機で撮った写真を元に、触れる地球を作り出していて、すごい

なと思ったからです。ぼくの夢は、将来理系の研究者になって、ノーベル賞をとることです。

五つ目は、三日目の「自己決定とセルフアドボカシー 合理的配慮を求める」の時間で、他人の考えは参考になるなと思った点です。なぜなら、他人の考えは、自分がどう思われているのかを知れるからです。

六つ目は、四日目の「なぜ大学との対話が求められるのか障害学生支援・基礎編」の時間で、合理的配慮はあらかじめ自分の障害を説明する文章やスライドを用意して、大学に行くべきと思った点です。なぜなら障害を持った人たちは大学に行くために、合理的配慮を求めていかないといけないからです。

この夏季プログラムの中で特に印象に残った点は四つ目のMicrosoftのことです。今後の人生は何が待っているかわからないけど、他人に助けを求めたら、絶対助けてくれるから、助けてと言いつつ、助けてくれたら、ありがとうと感謝します。障害を持ったみなさん、ぜひDO-IT Japanに参加して、会いましょう！





堀田 龍之介

Hotta Ryunosuke
東京都／高校生

頭の外側に信頼できる仕組みを作る

夏季プログラムの体験を通して、大切だと実感したことは、下記の2つである。

- ・自分の「障害」と「出来ること・出来ないこと」について説明でき、必要な支援を入れることができるようになること。
- ・「やりたいことを片付ける技術(GTD)」の導入

以前は、理解してくれている人がいつもいて説明してくれていたのだから、自分に必要な支援を適切に伝えることが出来なかった。その結果、酸素ポンペを一人で管理できるのに、一人通学を許可してもらえなかったことがある。自分の困っていることをしっかりと深く考えることができず、伝える言葉も考えていなかった。

その原因は、学校の授業を何とかこなすことで忙しく、自分の苦手な箇所を把握しきれていないことだった。また、根拠をもとに、自分の障害について、話す機会が少なかったことも分かった。

しかし、DO-IT Japanのプログラムへの参加で同じような体験をしている人が多く、話していく中で、自分の「出来ないこと・出来ること」を周囲に伝えられることの重要性を実感した。

上手くいかない根本として1番目に、中学生のころから、話を聞き逃していたり、メモもとれず、会話の内容を理解していなかったことがある。また、メモと聞くことがうまくいかず思考停止していた。発表資料を作っていく中で、このことを、以前受けた検査や、今回受けたURAWSSなどの結果を、根拠のあるデータとして、合理的配慮の発表資料に取り入れた。特に「書きに困難がある」ことでメモが取れずにいることを、自分で理解することができた。授業中に

無理にメモを取ろうとすることで、より混乱するということも分かった。

「会話や指示については、UDトークを使って目で見えるようにする」こと、「話を整理し、つなげるためにはマインドマップを使う」ことが有効だと分かった。

2番目に、中学生のころから、やることを網羅できていないために、直前に気づいて慌てて行動したり、運よく前日に気づいてもなかなか終わらずに、睡眠時間が短くなっていたことがある。また、片付けの時間を取らない事で、物をあちこちに置いていた。いつもぎりぎり始めて終わるまでやるしかない状態で、時間の見積もりをたてることがなかった。今回GTDを使って整理できることを知った。頭の外側に信頼できる仕組みを作るために、「すべてのやることを思い浮かばなくなるまで頭の外に出しきる(書き出す)→分類して→見極めて(水平思考)→見通す(垂直思考)」をやっている。すべてのやることを出すことがとても難しいけど、頭の外に出しておくことを続けてみようと思っている。

夏季プログラム以前は、「必要な支援が何かわかること」が目標だったが、「必要な支援を自分で考えて、実行する。必要な支援を、人に伝える。」ことが、重要だと分かった。続けることは大変だが、これからは工夫して大切なことを頑張っていきたいと思う。

今後は、具体的に読むことについての困難さがあることから、最終的には大学入試でも使えるように、学校の定期試験での読み取りアプリを使った配慮申請をしていきたいと考えている。



佐々木 愛美

Sasaki Ami

岡山県 / 大学生

まだ知らぬ新たなニーズを発見する

プログラム参加前の自分にとって、大学からの配慮はありがたいほど十分にもらうことができていた。そのため、スカラー選考の応募用紙を作成する際に自身の困難を捻出し、「困っていること」の記入欄に落とし込むことは正直難しかった。しかしこのような実態は夏季プログラムを通して、いい意味で覆された。

私は四肢の機能障害を持っている、大学2年生だ。そのため普段は、タブレットでの入力と学生サポーターさんによるノートテイクを併用し、講義ノートを取っている。今までは「私と相手の価値観が違うのは当然のことだ」と思い、お互いのノートに差異が生じているということを「困っていること」として捉えていなかった。しかし、夏季プログラムの中で「UDトーク」という文字通訳アプリと出会ったことで、講義や、プレゼンのフィードバック等、タイピングに集中しすぎて聞き逃してしまった部分や、再度じっくりと見直して整理したい箇所を確実に把握し、ノートに落とし込むことができた。そして、この経験がきっかけで、自身が本当に「困っていること」はノートテイクにあったということに気づくことができた。技術的な観点から、UDトークを講義に導入するのは難しかったがその代わりに、作成したマニュアルをもとに、ノートテイクしてもらうという新たな支援方法へとたどり着いた。

現地開催の予定だった夏季プログラムは、やむなくオンライン開催となってしまった。しかし、「せっかくスカラーになったのだから、何か挑戦してみたい!」と思った私は、地元のホテルにヘルパーさん2名を派遣して頂

き、1泊を過ごした。学校生活上で必要な身体的支援の方法を支援者に伝えたことはあっても、朝から夜までの生活サイクル上での介助方法について伝えたことはなかったため、この経験はとてもチャレンジングだった。ホテルでは、支援者にできる限り詳細に介助方法を伝えた結果、母と同じクオリティの介助を受けることができた。この経験を通して、自らが把握しているニーズを的確に伝える重要性を実感したとともに、将来的に一人暮らしをするうえでの自信を得ることができた。

「多くの人からさまざまな考えを吸収し、多様な経験を積みたい!」という想い一筋で私はスカラープログラムに応募したが、この夏季プログラムを通して、「さまざまな考え」・「多様な経験」を得たのはもちろんのこと、今までの私では気がつかなかった「本当のニーズ」を認識することができた。しかしもちろん、そのニーズだけが私が求めているニーズの全てではないだろう。だからこそ、これからのプログラムを通して、まだ知らぬ新たなニーズを発見するとともに、それらへのアプローチ方法を試すこと、つまり「気づき&トライ」の精神で日々を過ごすことが一番重要なのではないかと感じている。





高野 正志

Takano Tadashi

東京都／高校生

思いを言葉にして伝える

僕はDO-ITを通じて本当にいろんな人と出会い、様々な発見をしました。

夏季プログラムは4日間オンライン開催でしたが、中でも思い出深いのは3日目の夜に22スカラーだけで集まったことです。22スカラーのみならずと何気なく雑談する中で、ふと「僕は勉強だけで生きているのではないんだ」と感じました。というのも、自分の趣味や学校生活の話をしたら、意外にもみんな評価してくれたからです。これは、今まで勉強にちゃんと向き合えていない自分を情けなく思っていた僕にとっては大きな救いでした。22スカラー含めて、DO-ITには実に様々な人々が集まってきました。そして皆それぞれ固有の価値観を持っているので、その中にいると自然と自分の価値観は相対化されます。そして相対化されることで初めて考えを巡らせることができ、今まで自分を不安に陥れていたもののかなりの部分が思い込みだったり意識には上ってこない見方だったりすることがわかりました。

プログラムでは大学生の先輩スカラーや大学の研究者の方にお話を聞きましたが、高等教育を終えた後に特に重要になるのは「自分がどうしたいか」であることがひしひしと伝わってきました。今まで周りについていくことに必死になっていた自分にとって、はじめは「自分がやりたいこと」を大切にすることは難しいことのように感じました。でも、テクノロジーセッションで「何かを考えるには頭の中にあるものを一度外に出すのがよい」というアドバイスをもらったことで、少

しずつ自分の思いを言葉にできるようになり、そこから自分がどうしたいかが見え始めました。

そしてこのDO-ITを通じて学んだ最も大切なことは、「思いを言葉にして伝える」ことです。このことを強く実感したのが、夏季プログラム最初のセッションである熊谷晋一郎先生の講義を聞いて感想を述べたときでした。熊谷先生は僕の発した言葉の字面だけでなく、その言葉に乗せられた思いも一緒に受け取ってくださったように感じ、その後しばらくその嬉しさをかみしめていました。もし自分に何か思いがあったとしても、それを表出しなければ誰も気づくことはできません。特にその思いが「困っている」というようなことならば、不安は募っていく一方です。でも、自分の思いを伝えたら、それがあまりまとまっていなかったとしても誰かは必ず受け取って、手を差し伸べてくれます。そして孤立無援ではなくなるのです。おかげで僕も自分の将来に対して前向きになることができました。誰かと共同で何かをするときは、自分、相手両方の思いを受け止め、互いを尊重しあいながら物事を進めていきたいです。



岩月 和奏

Iwatsuki Wakana

兵庫県 / 高校生



私が生きやすいように

私がこのプログラムに参加した理由は、「自分が障害受容できているかが知りたい。また、私とは違う障害を持っている人と話したい」というものでした。スカラーや講師の方の話を聞いていくうちに、私が持っていた考えが次々と変わっていきました。

一つ目は、「合理的配慮への考え方」です。中学校の頃からやってはいたけれど症状が重くないし、正直親や先生任せの部分が大きかったです。まだその時は「私はちょっと見えないだけ」と勝手に勘違いしていました。ですが、普通高校に進学して、症状がより顕著に表れてきたこと、義務教育ではないため私自身が一から説明しなければならないこと、などたくさんの壁があることによく気が付きました。今まで頼ってばかりだったので、私自身で理解していくのはとても難しかったです。それに、障害受容できていなかったのが葛藤もたくさんありました。そんな中で合理的配慮を求めようとしても「私が少し頑張ればなんとかなる」と考えてしまい、合理的配慮を求めることをためらうこともありました。今回このプログラムに参加して、合理的配慮を求めることは恥ずかしいことではない、もっと求めるべきものだとかわり、いい意味で貪欲になっていいんだと学ぶことができました。遠慮してしまうこともあるけれど、私が生きやすいように合理的配慮を求めていこうと強く思いました。

二つ目は、「仲間の安心感」についてです。普通校に通っていたため、障害を持っている人と会うことが少なく、私がやっていることが正解なのか戸惑う

こともありました。でも同期のスカラーや過年度スカラーさんの話を聞いて、似たような経験をしている人がたくさんいて安心しました。前の人やっていたことをそのまま真似て、楽な道を選ぶのではなく、私自身にあった方法を取り入れるのがベストだと思いました。仮に、他の人と違う手段をとっても、仲間の安心感というのはとても大きいと感じた。

このプログラムでたくさんの人に出会い、たくさんの経験をさせていただきました。ここで学んだことをもっと社会に広めることを今後の目標にしようと思います。

高校二年の11月下旬、私は普通高校から特別資格支援学校へ転校しました。障害受容の途中で合理的配慮を求めることがとても難しく、先生とのコミュニケーションが上手いかなかったことが主な原因です。このプログラムを通して学んだことが生かされなかったと落ち込みましたが、転校前も転校後もたくさんの人に支えていただきました。こうして状況が変わったことで、また新たな考えが生まれてきました。この考えを、またこれからのプログラムに生かしていきたいと思いました。



1-2 特別聴講生プログラム

[8月9日(火)]

テクノロジーコース：小学生

学びの芽を育てることを目的とし、テクノロジーを軸としたプログラムとして「テクノロジーコース」を開催しています。小学生は、11名が選抜され、オンラインでプログラムに参加しました。

●テクノロジーワークショップ

iPad を触り、読み書きを楽しむ方法を体験しました。学校のプリントをiPadを使って読み書きするにはどうしたらよいのだろうか？頑張るところは、本当に字を綺麗に書くことなのか？実践を通しながら、参加者同士で意見を交換しあいました。



●トーク「ようこそ先輩」



読み書きにニーズをもつ先輩スカラールが、自分の学校生活を紹介。自分の障害とどう付き合ってるの？困ったときはどうしたの？配慮って求めてみて良かった？実は聞いてみたい、知りたいと思う問いかけを、先輩と意見交換しました。



渡辺陽
2017 スカラール

河高素子
2013 スカラール

●先端研クエスト2022

プレゼントが盗まれてしまった！取り戻すためにはiPadに届いた「謎」を解く必要があるみたい。

特別聴講生たちはiPadを片手に、先輩スカラールや大学生チューターと力をあわせながら謎解きに挑戦しました。



[参加者の感想(一部抜粋)]

僕は、コミュニケーションがあまり得意ではないですが、このDO-ITに参加し、たくさん話す機会ができて良かったです。

ノートに書くと次の日、疲れるという自分と同じ悩みを持っている先輩の話聞いて、無理しないでいいんだと思えました。

読んだり書いたりできないのは僕だけじゃないってわかりました。漢字も調べられるし読めました。僕は作文を書いたことがありません。でもこうして書けるようになりました。



特別聴講生「テクノロジーコース」に、中学生・高校生(29名)が選抜され、オンラインでプログラムに参加しました。自分自身の学習を楽にするヒントを見つけたり、学習との付き合い方を見直す時間を過ごしました。

●わくわくテクノロジーの紹介

教科書を見やすくする、先生の話聞きやすくする、ノートを書きやすくする、学習を支える身近なテクノロジーに触れました。タブレットなどのハイテクなものだけでなく、定規や書見台などのアナログもあなどれない!学習に向かうワクワク感を共有しました。



●テクノロジーを使って学んでみよう

学習の基本となる、読み・書き・計算を補うテクノロジーの実践!タブレットやパソコンの具体的なアプリや機能に触れながら、「読むってどういうこと?」「ノートテイクはなぜ必要?」などの前提について立ち止まって考え、学習の本質に迫っていきました。



[参加者の感想(一部抜粋)]

テクノロジーと一口でいっても、アナログなことからデジタルなことまであって、面白かったです。特性に合わせてやり方を変えていいという言葉で、目からウロコが落ちました。

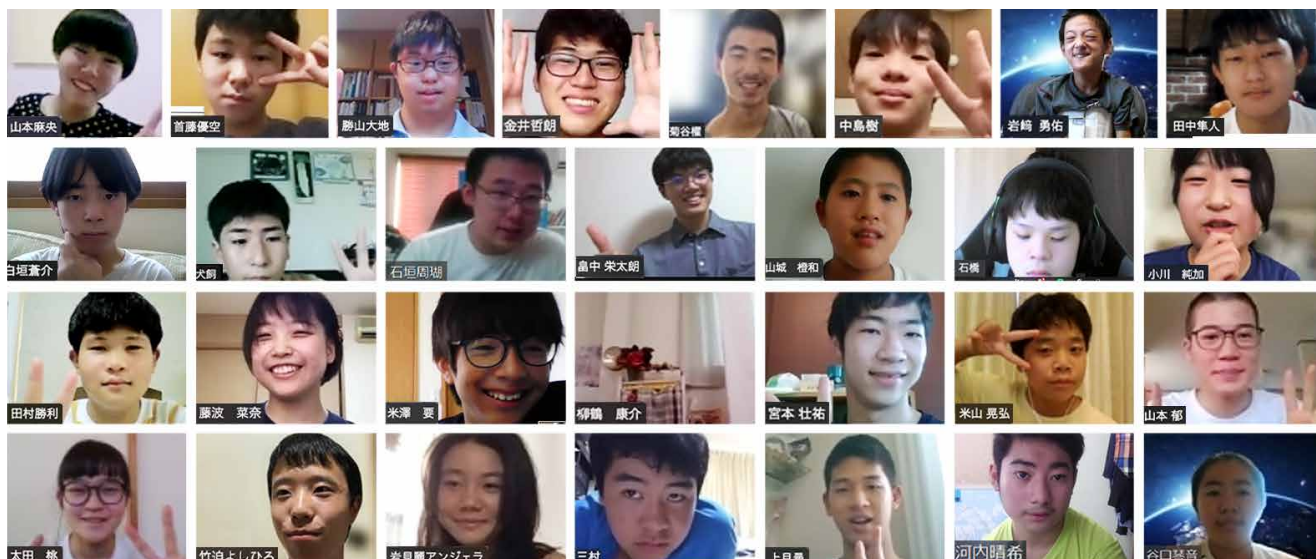
勉強に対する考え方が変わった。

学校のテストをiPadでできるようにしたい!!

勉強の向き合い方が変わりました。使えるものを活用して、自分にできる方法で勉強することが大切だと思います。

iPhoneのできる録音を使って授業をしてみたいなと思いました。

タブレット端末やノートパソコンなど持ち込みが許可されて少しずつ勉強の負担は無くなってはいましたが、私自身の一番根深い所にあるしんどいものは一切解消がされていなかったと最近気づきだしているときに、今回便利なアプリやソフトなどを教えてもらって、これからそれらを活用して少しずつ勉強というのを前向きに頑張っていきたいと思いました。



ダイバーシティコース

[8月10日(水)]

11名が選抜され、4日目のコンカレントセミナーに参加し、障害に対する考え方や価値観の多様性について考えを深める時間を過ごしました。ランチや休み時間には、先輩スカラーも集まり、相談や意見交換が行われました。

[スケジュール]

- オープニング
- コンカレントセミナー A 参加
- ランチトーク
- コンカレントセミナー B 参加
- コンカレントセミナー C 参加
- クロージング



参加者の感想 (一部抜粋)

議論は新鮮で、初めてのことで良かったです。障害のことであまり悩まない、自分では思っていたが、心の奥底にあった、不条理や疑問が浮かび上がってきてとても共感できました。「僕だったらこう思う」と、頭の中にたくさんの意見や考えが浮かびました。また、休憩中は他の参加者や、スタッフと雑談を楽しむことができました。自分から発言することもできて、有意義な時間でした。生き方や進路の考え方をたくさん得ることができました。今自分が置かれている社会や仕組みに目を向け、新しい考え、視点に出会うとてもいい機会でした。



障害を全く違う視点から見ることができ、面白かった！印象的だったのは、「自分の体の声を聴く」だ。自分に起きた出来事を機に自分の生き方を変えようと模索している最中なので、話を楽しみにしていた。挫折を活かしていける強みを感じた。また、考えを深められたのは、「みんなが楽しめるミュージアム作り」だ。様々な障害当事者から、思いもなかった案が次々と飛び出し、目から鱗が落ちるようだった。今回参加し、「自分の苦しみを社会に生きやすさとして還元できる自分」と、「障害当事者である自分を俯瞰できる自分」の双方の視点をもつことが重要だと思った。



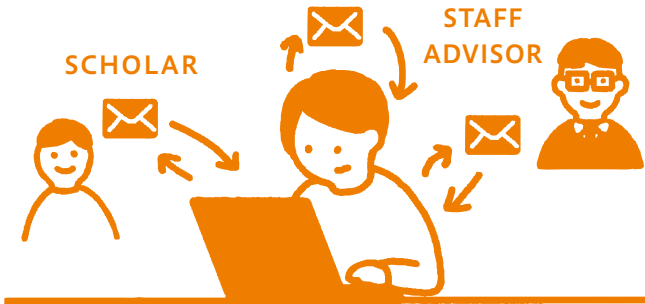
「見えない障害とカミングアウト」の感想が二つあります。一つ目は、説明が圧倒的に分かりやすい点です。自分はこのセッションの知識が曖昧だったのですごく助かりました。二つ目は「校長先生がiPadの使用を許可していても担任が理解しようとしなない」という事に対して、他の参加者の共感や考えが聞けたことです。自分は、その担任の配慮に関する理解不足が原因だと考えていて、この意見に他の参加者が共感してくれたことがとても嬉しかったです。



1-3 夏季プログラム後に行われるスカラープログラム

スカラーは、年間を通じて開催されるプログラムに参加します。定期的に行われるオンラインミーティングでの意見交換やメンタリング、スカラー同士や関係者との情報交換、イベント参加を通じ、多様な価値観に触れ、考えを深める機会を得ています。

DO-IT コミュニティへの参加：オンライン・オフラインでの交流



全国や海外にいるスカラー、アドバイザー、スタッフが繋がり、情報交換や意見交換を行っています。全国各地に散らばったスカラーが、メーリングリストを活用し、学校に対する配慮申請に必要な説明をするときのアドバイスをしあったり、介助を伴った一人暮らしについての情報を交換したりと、様々な日々の事柄について話し合っています。

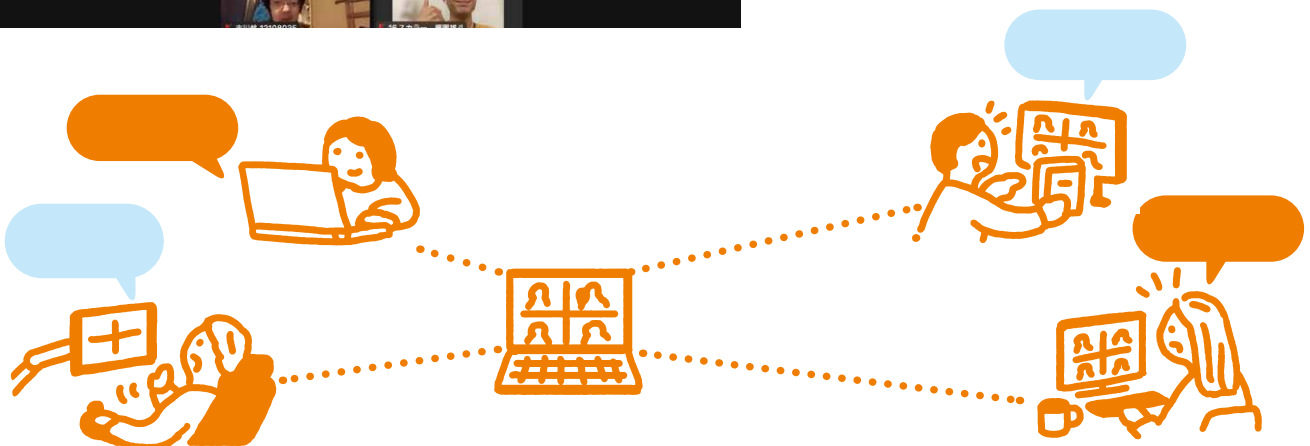
オンラインミーティングの開催・参加

毎月、テーマを設けて開催しています。ゲストスピーカーからの情報提供や、スカラー同士の意見交換など、活発なディスカッションを行っています。それぞれのスカラーは自身のニーズにあった方法で参加をしています。例えば、口話が難しい場合にはチャットを利用する、話の内容を頭のなかで整理するのが難しい場合はUDトーク（文字通訳アプリ）で会話を可視化して整理する等の方法を活用して参加しています。



2022 年度：オンラインミーティング・ギャザリングのテーマ

4月	近況共有&この1年の私
5月	環境の変化と必要な配慮
6月	入試：合理的配慮の今後
7月	夏の目標を語ろう
8月	夏の振り返り
9月	ようこそ2022 スカラー！
10月	配慮を求めるとは
11月	テクノロジーを活用する
12月	ギャザリング開催
1月	働くを語ろう
2月	日々のモヤモヤとのつき合い方
3月	ギャザリング開催



ギャザリングの開催・参加

「お互いをより深く知る」ことを大切にして、DO-ITインターン生が主体となって企画・実施しています。

2022年度は、オンライン会場に集合し、お互いに紹介したいものを持ち寄りながら談話しました。プログラムとは一味違う自由な意見交換の場は、様々なアイデアを共有する機会となっています。



イベント参加

「テクノロジーの活用」をテーマとした特別ツアーを組み、イベント参加しています。

2022年度は、10月開催「国際福祉機器展 (H.C.R. 2022)」に参加し、様々な支援機器の体験、ブース担当者との意見交換の後、参加者同士で情報交換の時間をとり、考えを共有しあいました。賑やかな会場内での円滑なコミュニケーションのため、フォニック補聴器を活用させていただきました。



国際福祉機器展 <https://hcr.or.jp/>

個別相談

DO-ITでは、スカラーが直面している日々の問題に関して、解決に向けて共に考える個別相談を実施しています。「セルフ・アドボカシー（自己権利擁護：自分にある権利を主張し、自分が参加する活動に対し、必要な配慮を説明し求めていくこと）」が実現するように、必要な情報やアセスメントの実施を提供しています。



インターンシップ

障害のある若者の新しい雇用のあり方を創出することを目的として、共催企業とインターンシップを実施しています。2022年度は、P&G ジャパンと DO-IT との共同開催で、インターンシップの実施に向けて準備を進めています。

海外リーダーシップ研修

大学生・大学院生を対象とし、海外の障害のある学生の就学・就労支援について知見を深めるプログラムを提供しています。2020年より、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染防止のため渡航を延期しています。



2 パルプログラム

パルプログラムは、情報発信を目的とした登録型プログラムです。障害のある本人とその保護者が登録できます。各月のテーマに沿ったパル向けのメールマガジンの発行と、パル登録者向けのセミナーを開催しています。

登録者の情報 総計：4,001名（2023年2月末集計） 海外も含む全国から登録がありました。

パルメールマガジンの発行

今年度は、お知らせやDO-ITに寄せられる質問とその回答、事例、コラムやイベントレポートなどを記載したメールマガジンを発行しました。



2022年度 パルメールマガジンの例

DO-IT Japan：DO-IT パルメールマガジン96号（7月）

【配信内容】

- (1) 合理的配慮：様々な試験における合理的配慮とテクノロジーの利用
- (2) 情報：大学入試センター 合理的配慮の出願前申請が始まります
- (3) Technology Tips：YouTubeのキャプションを音声読み上げ
- (4) 夏休みに：スタッフおすすめ映画の紹介

パルセミナーの開催

DO-IT Japanの活動紹介の後、「合理的配慮について、本人・保護者と学校が対話する際の基本的な考え方」として、対話の枠組み等に関する情報提供、テクノロジーを活用した学び方の例を紹介しました。セミナー後半ではスカラが登壇し、プログラム参加から現在に至るまでの考え、小学校からDO-ITへ参加するまでの経験などについて話題提供いただきました。

12月10日(土) 14時から17時、オンライン開催

【第1部】挨拶・話題提供・質疑応答

- 1) 合理的配慮について、本人・保護者と学校が対話する際の基本的な考え方
- 2) DO-ITで紹介するテクノロジーを活用した学び方の例
- 3) 質疑応答

【第2部】トークセッション「自分にあった学び方とは？」

話題提供



堀口 里奈
2017 スカラ



パルプログラム登録



登録は DO-IT Japan ウェブサイトより常時可能です。(インターネット上で登録できます)

パルプログラム登録ページ
へアクセス！

登録フォームに
参加者情報を登録

登録したアドレスに
完了メールが届けば完了



3

DO-IT Japanの様々な活動

DO-IT Japanの活動を多くの方へ知ってもらうため、ニュースレターの発行やイベントを開催しています。

ニュースレターの発行

DO-IT Japanの活動をお知らせするニュースレターを配信しています。DO-IT Japanに関心をお持ちの全ての方が登録できます。ウェブサイトから常時登録することができ、約2,500人の登録をいただいています。

こちらから登録
いただけます→



DO-IT Japan 説明会の開催

DO-IT Japanの活動や、スカラープログラムに関心がある方へ向けて、毎年説明会を開催しています。説明会の内容は主に、DO-ITの活動紹介と、スカラープログラム参加者募集案内の説明を行っています。

2022年度は、2021スカラー（初年度スカラー：高校生）と、2016スカラー（プログラムに参加して数年たったスカラー：社会人）の2名が話題提供者として登壇し、スカラープログラムに参加した動機やプログラムに参加して感じたこと、現在の学習・生活の様子や変化などを話してきました。

話題提供



森田 康生
2021 スカラー



榎田 温子
2016 スカラー

3月26日（土）13時から16時

Zoomによるウェビナー配信（無料）

一般公開

[スケジュール]

1) 挨拶・DO-IT Japanの活動紹介

2) スカラーからの話題提供

「スカラープログラムに参加してみて」

3) 応募説明

「DO-IT Japan2022スカラープログラム」

4) 質疑応答



DO-IT Japan2022説明会

【タイムスケジュール】 司会：奥山俊博（DO-IT Japan事務局）

◆挨拶・DO-IT Japan活動紹介
ディレクター挨拶：佐藤 武夫（DO-IT Japan・ディレクター）
DO-IT Japanの活動紹介：DO-IT Japan事務局

◆スカラーからの話題提供
2021年度スカラー：森田康生さん（高校生）
2016年度スカラー：榎田温子さん（社会人）
（休憩：14時半から14時50分）

◆DO-IT Japan2022スカラープログラム参加者募集についてのご案内
応募書類とスケジュールの紹介、応募についての質問受付：DO-IT Japan事務局

◆質問受付会！
話題提供：DO-IT Japanスカラー、DO-IT Japan事務局

◆閉会・スカラーから参加者の皆さんへメッセージ

【ご案内】

- ・録音や撮影、及びSNS等での配信は、ご遠慮ください。
- ・申し込み時にいただいた質問に速にお答えしていきます。全てにお答えできないことご了承ください。
- ・「QandA」で、当日なにかございましたら事務局にお知らせください。
- ・「チャット」は、事務局のアナウンスに使用いたします。
- ・聴覚の情報保障として「JDトークを使った文字通訳（修正あり）」を行います。
- ・当日の接続不良など、個別対応はできないこと、ご了承ください。

スクララーへの質問

- ・スカラーになった経過は？
- ・生活の変化がありましたか？
- ・印象に残ったプログラムは？
- ・学習方法は変わりましたか？



※2023年3月25日（土）オンラインで2023年度の説明会を開催いたします。詳細・参加登録はこちら▶



4

スカラーたちの活動 インタビュー

スカラーの紹介として、インタビューを行っています。今回、4つのストーリーを記録しています。グループインタビューでは、多種多様な職種で働くスカラー3人に、「働く×障害」をテーマとしてお話を伺いました。個別インタビューでは、分野変更して大学院進学するスカラー、職場転換してスポーツ選手を目指すスカラー、幼少期からの夢を叶え就職したスカラーが、それぞれの視点で、自身の活動の中身や魅力について語ってくれました。読者へのアドバイスもいただいています。

「仕事」を選び、決めるときに気づいたこと

就活エピソードが聞きたいです。

柁田 社会福祉士になりたくて、その資格を取得できる私立大学に進学しました。でも就活時に、今の自分の知識と経験でその仕事につくことは難しいと感じていたため、他の同級生と同じように一般企業を目指すことにしました。クローバーナビやウェブサーナなどを使い、障害者用の合同説明会で情報収集して出会ったのが今の会社です。内定の連絡が来た日はお祭り気分でした(笑)。



森 大学は経済学部に通っていましたが、周りが就活に動き出した時、自分は何がしたいんだろうという学生によくある悩みと、障害のある自分が周りと同じキャリアアップを望めるのかという悩みがありました。その中でも自分がどんなことに携わりたいかを考えて、障害のある若者の自己実現や、障害者を阻む社会構造を取り除くことだと思いました。そして、新卒時に障害者に向けたNPO団体の海外派遣事業でアメリカに行き、その1年後に今の職場に就職しました。

川口 中学生から国際協力に携わる仕事があったので、それが学べる私立大学に進学しました。就活でも上記に関わる仕事につきたいと考えましたが、そういう職種は大学院を出ていたり高度な英語が話せたりしないと難しく、内定に

は至りませんでした。今の会社は、合同説明会で人事の方と知り合い、連絡を取るようになって就職しました。国際協力の仕事を諦めたわけではなく、仕事をしながら勉強をして、いずれは自分の夢を叶えようと人生を長期的なスパンで考えています。

就活を振り返って思うことは？

森 正直学生の時に自分の障害特性を踏まえて、どんな困難さが職場にあるか、どんな配慮が必要かを過不足なく言える人はいないと思います。でも、そうは言っても自分のことを知ることは重要です。大学のキャリアセンターや障害学生支援室など他人の力を借りて、現時点で必要だと思う配慮を整理することが重要じゃないかと思っています。

川口 学生と社会人とは、受けたい配慮が違うんですね。なので、まずは面接官と対話できる関係性を築いて、現時点で自分に必要な配慮を話せるようにしておくことは大事だと、私も思います。そして、話したときに会社側がどんな反応を示したか、自分はその反応に納得したかも注視しておいた方がよいポイントだと思いました。



柁田 私の会社は面接の時に、「つらかったらノイズキャンセリングを着けていからね」と言ってくれました。冷たい会社もあれば、向こうから「いいよ」と言ってくれるところもある。私は「働きたいんだ!」という気持ちを持ち続けて、その

ご縁を手繰り寄せていけるかどうかも大切だと思います。

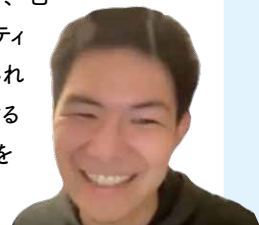
「一緒に」仕事をする上で大切にしていること

働く中で感じたやりがいや発見は？

柁田 自分が手塩にかけた部下が1人で業務を担当できるようになって成長した姿を見るとやはり嬉しいです。また最近は、「これどうやるの?」と聞かれることも増えてきて、職場の一員になれたと感じています。気づいたら入社して4年が経っていて、「なんだ私、障害があっても働けるじゃん!」と思っています。

川口 相手にわかりやすく説明することを心がけているので、「よくわかりました」「ありがとう」という言葉をもらえるのは、純粹にやりがいです。また、人事の仕事とは別に、会社の研究所で視覚障がい者向けの製品開発にも携わることになり、当事者として意見を言えることを嬉しく思っています。

森 面接や説明会で「人と話す・聞く」という仕事をやっていた1年目は、やりがい明確でした。なぜなら自分に見えるくさがあることが、ポジティブにもネガティブにも作用しにくい仕事だったからです。他の人と同じレースを走れている感覚がありました。今は採用部門で障害者雇用の仕事をしていますが、自分の会社をマイノリティ性のある人が排除されない組織にしていけることに、やりがいを感じています。



[インタビュー メンバー紹介]



森 雄大 2010 スカラー
Mori Yudai

障害福祉系会社の人事部所属(4年目)。視覚障害(弱視・視野)があり、PC音声読み上げ機能などを活用して業務に従事。



川口 真実 2011 スカラー
Kawaguchi Mami

消費財メーカーの人事部所属(5年目)。視覚障害(弱視)があり、拡大読書器や音声読み上げ機能などを利用して業務に従事。



柘田 温子 2016 スカラー
Masuda Atsuko

鉄道会社のメンテナンス部門・総務所属(5年目)。広汎性発達障害・発達性協調運動障害があり、ノイズキャンセリングイヤホンの装着などをして業務に従事。

働く中で感じた課題や気付きは？

森 良かれと思ってしていただいた配慮が自分にマッチしていないことがあります。視覚障害のイメージがその人の中であって、それを僕に投影してくるようなコミュニケーションを求められると、モヤモヤを感じます。これは必ずしも相手が悪い訳ではないのですが、対話不足から発生しているモヤモヤだと思います。

川口 私は普通にしていたら障がいがあることが周りからわからないので、障がいを忘れられてしまう時があります。そういう時は、合理的配慮を都度相手に伝えていく必要があるのですが、それがストレスに感じる時があります。

柘田 私は最近体の関係で通勤が難しくなってしまったのですが、職場ではまだテレワークが認められていません。このように前例がないことをお願いすると簡単には話が進まないことがあります。出社は前提という認識が、私にも会社内にもあったと感じました。

周りとはどう関わるとよいのだろうか？

川口 対話をして、障がい者と健常者がどれだけ認識をすり合わせられるかがポイントなのかなと思います。障がいがあるなしに関係なく一人ひとり違う人間なので、話をしてわかり合えるように努めることが大事だと思います。

森 そうですね。そうした対話がないことで、必要な配慮が得られないと

か、逆に unnecessary 配慮をされたりもしますからね。

柘田 お二人に共感します。そして対話の際に助けになるツールが合理的配慮だと思います。合理的配慮は障害者特有のものだと思われがちですが、そういうわけではありません。お互い配慮しているよというスタンスで、障害者も健常者もみんな働いていけたらと思います。



読者へ、メッセージをお願いします

森 働くということを、過度にハードルを上げて考えすぎないでもいいと思います。例えば、文字を読めないと働けないんじゃないか、コミュニケーションがうまくないと駄目じゃないか、週5で出勤できないといけないんじゃないか、などです。私も自分にすごくプレッシャーをかけていましたが、社会に出るにはこうで



なきやいけないと悩みすぎて、自分自身を苦しめなくても良かったなと、今は思います。

川口 私もとられないことが大事だと思います。前例がないなら自分でつくろう、くらいに考えた方が、後に続く後輩たちにとっても良い環境を整備できる気がします。別に障がいがあるからといって絶対に働けないわけではないですし、「ここでダメなら別の場所」と、広い視点を持つことが大事だと思います。



柘田 言いたかったことを、お2人に言われてしまいました(笑)。私は「とりあえずやってみよう!」という言葉をかけたいです。就活も仕事も失敗したり嫌なことないわけではないけれど、やってみたらこそ見える景色だったり、人とのつながりだったり、「自分って貢献できるんだ」と知ったりすることもできると思うんです。だから「考える前にやってみたら!」と伝えたいですね。

2022/12/12



インタビュー：進学・就職したスカラーたち

「毎日のいろいろが、私を作っていく」

【大学生活を送るバランスとプロセス】についてインタビューしました



堀口 里奈
Horiguchi Rina
大学生 / 千葉県

自己紹介をお願いします

外国語学部に所属、ネットワーク分析をテーマに研究しています。聴覚・視覚の過敏さと読み書き（特に英語・カタカナ）が苦手なため、必要に応じてノイズキャンセリングヘッドフォンをつけたり、PCの読み上げ機能を使っています。アルバイト経験から、ソフトクリームを片手で一度に4本巻くことができます。

分野変更して大学院に進学されるのですね

障害学を学べる国立大学院に進学します。日本語教員を目指していましたが、3年生時に転機がありました。

私には生活を共にする車椅子ユーザーの友人がいます。毎日一緒に過ごす中で、車椅子での移動は、思った以上に時間がかかることがわかりました。本人と一緒に行動する人が、経路を選択でき最短経路や時間を調べることができるツールが作れたらいいなと障害のある人のICT活用に関心を持ち、障害のこと、自分にはなかった時間感覚や価値観を持つ人ともっと関わりたいと思いました。

進学先はどのように探して決めましたか？

まず大学院の入試内容と時期を調べました。院入試は、基礎学力と面接（研究計画を示す）が多いことを知りました。私は面接研究計画の配分が高い学校を候補にしました。その後、希望教員の授業を科目履修生として受講したり学生さんに話をしたりして学校の雰囲気を見て、受験校を決めました。大学の支援室や友人たちにも、よく相談にのってもらいました。

配慮申請について教えてください

配慮申請は、読み書きが関係する物では大抵行いますが、事前相談が必要な場合や詳しい読み書きの状況説明（根拠資料）が求められるなど、申請する機関によって対応が異なるため、回数を重ねても難しいと悩みます。

院入試で求めた配慮は、ノイズキャンセリングヘッドホンの使用、試験時間の延長、キャストではない椅子と机の使用、PC入力解答、PCの音声読み上げ機能を利用した問題用紙の読み上げです。文章だけで希望する配慮が伝わるか心配だったため、受けた環境をイラストに表して説明し、合意を得ました。ここまで申請しても希望通りに受験できるか疑心暗鬼になったりしましたが、不測の事態の対応も含めて自分に必要な環境を遠慮せず伝えたことで、当日まで受験勉強に集中することができました。

やりとりは大変でしたが、英語能力試験で、タブレットの音声読み上げ機能を使って受験できたのはホッとしました（初事例）。

したいことと、やるべきこととの、バランスのとり方は？

私は一つのことは頑張れる人です。院入試では、安全策を多く取り要領よく進めたい気持ちはありましたが、私には整理できず難しいと思いました。まず大学の3年間で可能な授業単位を全部取る。4年時に進路に向けて動く。と決めて受験にむかいました。

私生活でも、一つ一つすることを意識しています。「これをやりたいと思ったら、じゃあ、まずはこれをしたほうがよいよね」と優先順位をつけ、決めたらなるべく早く動くようにしています。あと、したいことと、しなきゃいけないことを周囲にとりあえず話しておく、誰かが声をかけてくれたり、良い感じに予定がまとまったりして、うまくいっている気がします。

後輩へメッセージをどうぞ！

2019年大学進学したときの報告書インタビューでは、分野を変えて大学院進学していることなど想像もしていませんでした。コロナ禍もあり想定通りにいかないこともありました。関心のある研究会に誘ってもらったり、沢山の人の背中を押してもらい、一緒に考えてくれる人達がいたから今の自分があると思います。配慮に限らず何かうまくいかない時は、一人で考えず「助けて」と、友達やDO-IT、スカラーなど複数の人に相談してみるのも一つの方法だと思います（不調の時は相談する連絡を取るのも億劫ですよ）。最後の決定権だけは自分であるということさえ忘れずにいれば大学生活は時間が組み立てやすくなるので疲れたら休みながらやりたいこと全部やり尽くしてください。



「好きなものの見つけ方・付き合い方」

【出会いのチャンスと自身の行動】についてインタビューしました



関根 彩香
Sekine Sayaka
社会人／埼玉県

自己紹介をお願いします

障害は頸髄損傷の完全麻痺です。数年前にスマートスピーカー等を導入し、スマホや声で家電や鍵、インターホン等を操作できるようになり自由度が増しました。他にタッチパッドが右端にあるワイヤレスキーボードを愛用中。

転職して新しい仕事&活動をされていると聞きました

昨年、オリンピック・パラリンピックなどの国際競技大会に出場希望をもつ人を対象としたプロジェクトに応募しポッチャという競技と出会いました。ずっと何かスポーツがしたいと思ってきましたが競技として続けられるものと出会えずにはいりましたが、ポッチャから声をかけていただき開始。私は手で投げられないため、勾配具（ランプ）を使い、アシスタントと2人で競技をします。知れば知るほど奥深く面白い競技だと感じていて、これから世界を目指したいと思い、練習時間が確保しやすい会社に転職し、在宅勤務をしています。

前職との出会い方も印象的でしたよね

大学院生時代、6か月間のインターンシップに平日ホテル利用、週末家に帰るスタイルで参加。その後、契約社員で約3年従事しました。就職先として検討もしましたが新卒採用は私がやりたい職種の募集がなく他を探しますが、なかなかうまくいかず精神的に疲れてしまい、気分転換にと遊びに行くことに。その頃スキーに興味があり、ネットで探していたところ当日締切のチェアスキーのツアーを見つけて応募。夕食時に就活が行き詰まっていることを話していたら、名刺をくれて会社見学に来てみない？と声をかけてもらい、行きます！と言ったのが最初の出会いです。その後、見学に行った際に会社や業務の説明を伺い、面白そうと思い応募し、福

祉機器の販売に関する会社に就職しました。

働いてみて気づいた自分自身の発見が聞きたいです

私はインターンシップに参加したおかげで、通勤ラッシュの不安やそもそも働けるのか？という不安が解消され、自信になりました。また何となくですが自分が好き・楽しいこと、逆に苦手なことが分かってきて、就活の参考になりました。

業務では、ホームページの更新や販促物の作成等は好きでした。逆に売上分析等は苦手感がありました。

学生時代に経験してよかったことは？

DO-IT でしごかれたなと思っていますが（笑）、時間管理の大切さや自分のことを知り、それを説明する力がついたのは役立っています。私は卒業したら就職すると決めていたので、先に生活基盤を整えようと考えました。院の1年目が終わったところで休学し、一人暮らしを開始。当初は介助者と長時間一緒にいることに慣れていなかったため自宅でもほっとできず、また介助者の交代時間に縛られる生活や言いたいことを我慢してストレスが溜まり体調を崩したりもしました。実家に戻ろうかと挫けそうになった時もありましたが、全部ではなく一部手伝ってもらおうと週1回休日として家族に来てもらい、時間に縛られない日を作りました。その後、徐々に介助者との距離感もつかめていきました。いまま失敗しながら学んでいます。

プライベートはどんなことをしていますか？

車いすだと着たくても着られない服や座位だときれいに着こなせない既製服が多く、モヤモヤを抱えてきました。数年前あるプロジェクトに参加し、憧れの世界で活躍するデザイナーの姿を見て、つくる側への憧れが強くなりました。そんな時、オンラインで学べるスクールが開校することを知り、好きを学べるチャンスを見つけたのは約9か月間、一からファッションを学び、最後にこだわりの一着ができた時は嬉しかったです。

先輩へメッセージをどうぞ！

色々な所に行って色々な人に出会うことで、選択肢が広がると思うので積極的に行動してほしいなと思います。時にあなたのことを邪魔する人が現れるかも…でも自分の人生、自分が主役です。最初から上手いかわからなくても、やりたいことを発信し続けたら応援してくれる人がきっといます。支えてくれる人を大切に、最後まで諦めなければ道は開けると私は信じています。

みなさんも自分の気持ち大切に、やりたいことと出会って、自分だけの人生を歩んでください。



「思いきって飛び込んでみる」

【夢・就職の過程やその思い】についてインタビューしました



遠山 弘晃

Toyama Hiroaki
社会人／茨城県

自己紹介をお願いします

私は左腕に重度、右腕に軽度の麻痺があり、両手の必要な作業や字を書くなど細かな作業に困難があります。昨年の春、人の生活を支えるロボット技術を研究開発・製造・出荷するCYBERDYNEという会社に就職しました。幼い頃からの夢を叶えるスタートラインにつくことができました。

将来の夢と大学・大学院での学びを教えてください

障害によって困難なことも、それを困難でなくす道具があれば良いと考え、障害や病気によって困難を抱える人が、一度きりの人生を最大限に楽しむ助けとなる技術を作ることが、私の将来の夢となりました。

大学で、人・ロボット・情報系を融合複合した新領域であるサイバニクス分野と出会い、大学院では、麻痺により片腕が使えない人が抱える困難の解決に向け、脳神経・筋系情報や音声情報など人の意思・動作に関する様々な情報を介して身体と一体化し、新たな腕となって日常生活を支援するサイバニックロボットアームの研究開発に取り組みました。

就活はどのような活動をされましたか？

就職したい会社は、大学3年生時におおよそ決まっていました。自分が働くイメージを鮮明にするために、インターンシップに参加しました。参加すると、不安に思っていたことが実は問題ではなかったり、逆に予想外の問題が見つかったりと、良い点悪い点も含め、多くの発見がありました。インターンは、自分がこの会社でやりたい仕事ができるのかを確認するだけでなく、会社の方々にとっても、私と働く環境を一緒に考えてもらう機会になったのではないかと思います。

進路に迷うことは、ありましたか？

困難に直面することは多々ありましたが、進路変更を考えたことはなかったです。通常的手段が難しかったとしても、合理的配慮の申請や新しい方法の提案など、ひとまずできることは全て試してみようと考え、実践してきました。その根底には「人生は一度きりなのだから、とりあえずできることはすべて試してみよう。それでも上手くいかなければ、それはそれで納得できるだろう。」という考えがありました。多くの人のサポートや受け入れてくださった方々のおかげもあり、自分の夢に向かって進み続けることができました。そう考えると「考えずに済んだ」というのが正しいのかもしれません。

活動中に困ることが起きたら、どう対応しているの？

希望する学びや仕事への参加を可能にしているのは、テクノロジーの活用とチームのサポート（分業）です。ロボット作りの現場には、様々な最新の加工機があり、ほとんどの部品や回路基板はパソコンで設計すると、加工機が自動で造形してくれるのです！大学では、研究室のチームのサポートも受けました。私も論文の添削や設計補助など自分の得意を生かした分野で彼らをサポートしました。今の仕事でも、設計、プログラミングなどの各業務は、得意・不得意を考慮して得意とするメンバーが担当します。自分のできることを活かし、プロジェクトの成功に貢献できていると思います。

そういえば、すごい記録をとったと聞きました

実は昨年の春よりパラ水泳に挑戦していました！元々ハビリとして泳いでいたのですが、意外と自分は速いかも？と思ったのがきっかけです。30歳近い今からはじめても良いものかなど考えましたが、試しに挑戦してみようと選手活動をスタートしました。その結果、全国大会まで進み、得意の平泳ぎでは金メダルを獲ることができました。結果に関わらず全力を尽くした後はとても気持ちが良いもので、今の自分にとってはなくてはならない活動の一つとなっています。

後輩へメッセージをどうぞ！

自分のやりたいこと、興味のあることがあったら、ぜひ自分なりの方法でチャレンジしてみてください。長い道のりとなることや、ときには上手くいかないこともあります。その結果、叶う夢や新しい道が見えることもあると思います。私もこれからの人生も、身体の声聞きながら、色々なチャレンジを皆さんと一緒にしていけたらと思います。



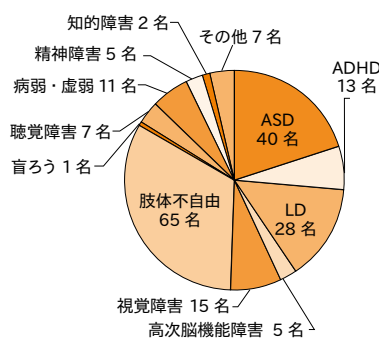
5

DO-IT Japan スカラーのデータ

2022年度は、計9名の高校生・大学生がスカラーとして選抜されました。DO-ITは開始から15年を迎え、選抜されたスカラーの多くは大学進学し、大学院進学や就労等の多様な道を選択し、社会進出しています。

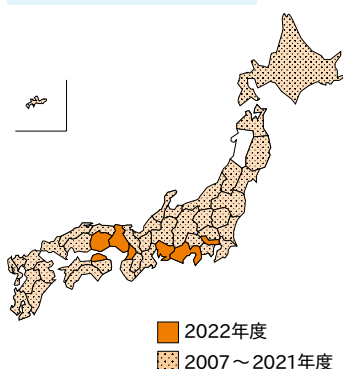
DO-IT Japan 2022年度データ (2023年2月)

スカラーの障害内訳



※スカラー総数 146名の障害内訳 (重複あり)

スカラーの出身地



スカラーの人数と進路



スカラー総数 **146名**
※退会者を除く



大学等進学
124名

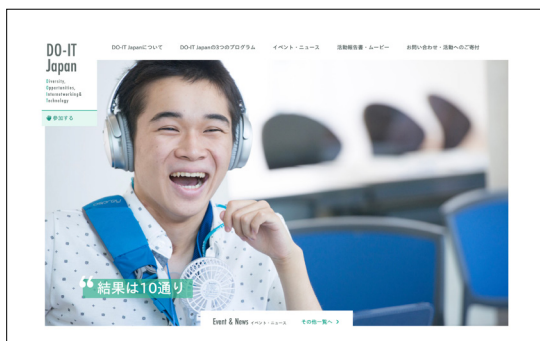


うち大学院進学
22名



就職
62名

DO-IT Japan について



詳しくはウェブサイトをご覧ください!
<https://doit-japan.org/>

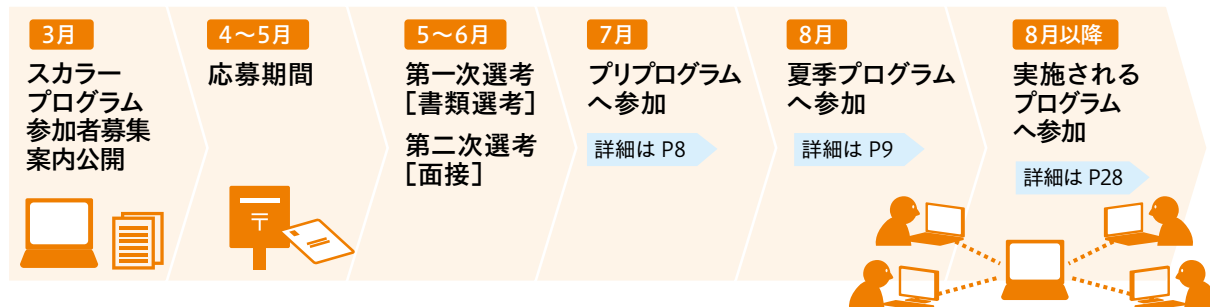


ご寄付のご案内

DO-IT Japanの活動は、皆様のご協力・ご支援によって支えられています。
※寄付に対する税制上の優遇措置など、詳しくはウェブサイトをご覧ください。



応募方法の流れ



お問い合わせ

DO-IT Japan 事務局

153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1
東京大学先端科学技術研究センター
社会包摂システム分野

[Tel & Fax] 03-5452-5443
[Mail] toiawase@doit-japan.org
[Web] <https://doit-japan.org/>

6

共催・協力・後援

共催企業3社の皆様と連携し、プログラムの運営や企画開発を行っています。また、協力企業や官公庁の皆様からも、運営のご支援や応援をいただいています。個人として活動や運営をサポートして下さる皆様にも支えられています。

(50音順)

共催企業



ソフトバンク株式会社

ウェブサイト↓

プログラム実施のため、参加者用に「iPad mini」「Google Pixel 3a」を貸与いただきました。夏季プログラム2日目に、社員の方と大学生・大学院生向けのプログラムセッションを作成し、話題提供者としてご登壇いただきました。



日本マイクロソフト株式会社

ウェブサイト↓

夏季プログラム3日目に、社員の方と2022スカラー向けのプログラムセッションを作成し、話題提供者としてご登壇いただきました。当日は、品川本社のオフィスと参加者を遠隔で繋ぎ、オンラインでオフィスツアーを実施いただきました。特別にノベルティグッズなどもいただきました。



P&G ジャパン

ウェブサイト↓

モデルケースとなる障害のある大学生向けの「インターンシップ・プログラム」の実施に向け、社員の方と打ち合わせ・意見交換する時間をいただきました。また、障害のある人と就業を共にしたことにより想定される意識や行動の変容事例を集め、社員の実際の行動変化を基にした「Disability Confidence Survey」の作成に向けて、ヒアリング調査や定期的な打ち合わせを行いました。



協力企業

株式会社 atacLab

自分の読み書きの速度が同学年と比べてどの位置にいるのかを評価することができるアセスメント「URAWSS II」「URAWSS English」をご提供いただきました。時間延長やタイピング入力の配慮を求める際に、エビデンスを持って他者に説明するためのアセスメントとして使用させていただきました。

ウェブサイト↓



株式会社カプセルアシスト

DO-IT Japan の開催するプログラムやイベント、シンポジウムにて、音声認識アプリ「UD トーク」を用いた「遠隔文字通訳」を実施いただきました。音声での会話を視覚的な情報にすることが、聴覚に障害がある人のためだけでなく、会話の流れを整理するためにも活用できることを教えていただきました。

ウェブサイト↓



株式会社リコー

自分を取り囲む全ての景色を撮影できる360度カメラ「RICOH THETA (リコーシータ)」をご提供いただきました。空間を把握しやすい特徴を活かし、オンラインにより参加するスカラー達へ向けて、車椅子ユーザーが乗降できる福祉車両を紹介する際に活用させていただきました。

ウェブサイト↓



トヨタモビリティサービス株式会社

車椅子ユーザーがスムーズに乗降できる車両を体験できる機会は多くありません。またレンタルという社会サービスを知ることは重要です。夏季プログラム期間中「ウェルキャブ(福祉車両)」を複数台お貸しいただき、公共交通機関とは異なる移動手段である、福祉車両の紹介をさせていただきました。

ウェブサイト↓



フォナック補聴器

先生の声など特定の人の声を聞き分けることに困難がある人がいます。秋に開催された国際福祉機器展(H.C.R. 2022)において展示を見て回る時に、デジタルワイヤレス補聴援助システム Roger (ロジャー) シリーズをご貸与いただきました。聞こえの補助に加え、発信する側の声帯(のど)を守る為にも活用させていただきました。

ウェブサイト↓



後援

厚生労働省

文部科学省

DO-IT Japan をサポートしてくれている人々

- 講師・話題提供者 / 40名 (25大学、15企業・団体)
 - 大学生チューター / 25名 (大学・大学院生)
 - スタッフ・アドバイザー・ボランティアスタッフ / 25名 (13大学、10企業・団体)
- その他、多くの方のご寄付・ご協力をいただいております。深く感謝申し上げます。

共同主催の東大先端研より、夏季プログラム参加者へ「先端研グッズ」をいただきました。



